
けいおん!! ~ 転生者が送るストーリー ~

DEATH DEVIL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！〜転生者が送るストーリー〜

【Nコード】

N2913N

【作者名】

DEATH DEVIL

【あらすじ】

オタクな大学3年生の春山空は神の使い魔に殺され、第二の人生を送ることになった。空の新しい人生はスローライフか、それともはちゃめちゃライフか！！空の第二の人生が今始まる

プロローグ

俺の名前は春山空。オタクな大学3年生……。のはずだった。しかし、空から降ってきた隕石により死んでしまった。俺が最後に見たのは隕石により臓器が飛び出している自分の姿だった。見た時は吐きそうになってしまった。そして今は、何もない空間に立っていた。

「光だ」

俺の前に光が見える。俺は光に向かって歩き始めた。
コツコツコツコツ タッタッタッタ

俺の足は歩みから、走りに変わっていた。光の先にあっただのは草原だった。草原には一人の少女と狼がいた。

「君、危ないよ」

俺は声をかけた。狼は危ない動物だから

「大丈夫。あなたが空くん？」

俺の名前を呼ばれたときはびっくりしてしまった。見ず知らずの少女の口から、俺の名前が出るとは思っていなかった。

「そうだけど・・・俺が何か？」

そこだ。俺は確かにあの時死んだ。俺は自分の死に際を見たのだ

「すみませんでした」

「狼がしゃべった!!」

少女といた狼がしゃべったのだ。しかも謝罪の言葉で・・・謝罪？

「このたびは私の使い魔が迷惑をかけてすみませんでした」

・・・？なんのことだ？俺にはさっぱり

「なんのこと？」

「・・・」

しばしの沈黙

「すみませんでした！俺があなたを殺してしまいました。隕石を落

とす場所を間違えて書き換えてしまったんです」

隕石の場所を書き換えた・・・？八八八、ジヨウダンデシヨ

「じゃあなに？あなたは自分は神様だ！とこいうの？」

一応聞く。もしかすると病院送りかもしれない

「そこまでは言いませんが・・・私は神です」

「八八八面白い冗談だね・・・」

俺が言うとなきそうになる自称神

・・・ガチで？

「おいおい、泣きそうになるなよ」

「だ、だつて～えーん」

うわ泣いちゃったよ・・・キャラ変りすぎ

「ごめんごめん。信じるから」

「ほ、本当ですか？」

まだ潤んだ目＋上目遣いでこちらを見るなー！！襲いたくなる！！

「へ、変な事言わないでくださいよ。まだ、誰にも上げてないんだ

から」

「え？口に出してた？後は何も言わん」

「うう～／＼／」

涙目＋頬を赤くしての上目遣い

・・・空のHPは0になった

「エレナ様。は、早く本題を」

お！いたんだこいつ。忘れてたww

「忘れないでください！」

「どうしたの？アルフ」

「いえ、なんかそういえと電波が来たんで」

「ふ～ん。へんなアルフ」

あ、危ない。なんて勘の鋭い狼なんだ！

「あの～ほんとにすいませんでした」

ああ、忘れてた

「お兄さん、ちゃんと素直に謝る娘、好きだから許しちゃう」

「ほ、本当ですか!？」

「うん」

「じゃあ、お礼に違う世界に転生させて上げます」

「・・・イマナント? テンセイ?

俺の頭の中で方程式が完成した

テンセイ=アニメ+オリ主

「・・・まじで?」

「はい本気と書いてまじと読みます」

「・・・」

「?ど「しゃあああ!」た・・・」

「場所は?能力は?」

「・・・はあ、場所と能力は自分で選べます。ただし能力は5個までです(なんか態度変りすぎでしょ)」

「じゃあ、けいおんの世界で澪や唯と同じ年齢」

「わかりました。能力はどうしますか?」

「うーん。まずは音楽の才能や楽器の弾き方。コードの読み方の知識など、音楽に関することは全部。歌声もね!二つ目は身体能力を無限にしてくれ。つまり最強に。それで知能を上げてくれ天才的に後は資金だな。最後が・・・どうしようか?いいのある?」

「そうですね・・・あなたの世界のアニメやゲームの能力や技などはどうですか?」

「・・・それだ!」

「わかりました。やっておきますね。」

俺が光り輝いて力がみなぎってくる。

「すごい力だ。ありがとうエレナ(今思うけどずいぶんチートだな。それに能力も5個以上な気が・・・まあいいか)」

そんなことを考えていると、目の前に扉が現れる

「この扉の向こうへ行けば、けいおんの世界です」

「いろいろありがとう。では、春山空行きまーす」

俺は扉に飛び込むと意識を失った

最後に「ガンダムですね。わかります」と聞こえたが、気にしないことにする。

俺が意識を取り戻すと真っ暗だった・・・いや、まぶたが開いてないのか。俺がまぶたを開けると二人の男と女がいた

「政美、目を覚ましたぞ！」

「本当？明彦さん」

「ああ」

「うぎゃーうぎゃー（なんだこの人たち）」

・・・赤ちゃんになってる！！

まじかよ・・・

俺は再び眠りについた

第一話 小さい頃1（前書き）

空の目の色は透き通るようなオレンジで髪の色は鮮やかなオレンジ色だ

第一話 小さい頃1

あれから3年がたち俺は3歳になっていた。

時間が飛びすぎだつて？そんなの関係ないよ。もしかして赤ちゃんのときの俺のよちよちぶりを見たかったのか？・・・そんなやっつないか。まあ何はともあれ、俺はやつと3歳になった。生まれたばかりの解きは、さすがに喋れなかったが一日もすれば喋れるようになった。歩くことだつてできた。けれど俺は周りの赤ちゃんと同じように過ごした。一応普通の赤ちゃんのように・・・そして声の練習や歩く練習をさせられた。それに耐え続け、やつとここまで来た。喋つても歩いてもおかしくない年頃。それに能力はちゃんといっていた。両親が出かけているときに、ベットから落ちこちてしまったつたが咄嗟の判断で着地に成功した。赤ちゃんが宙返りつてどうよ・・・orz

ついでに俺の親の紹介をしておこう。

春山明彦。俺の父親でギターをやっている。

春山政美。俺の母親でベースをやっている。

両親はバンドを組んでいて結構有名らしい。

今はバンドもやっているが、父は春山財閥の社長さんもやっているらしい。お爺さんから引き継いだとか何とか。

母親は桜校出身で川口紀美さん。つまりDEATH DEVILのベース担当の人とは親友らしくよくうちに来ている。さらに、うちの両親はバンドで知り合った中野拓也さんと中野遥さんと仲が良好らしく、中野宅に娘が生まれたとき見せに来てたっけ。その娘の名前が梓でびっくりしちやつたよ。

そして月日は流れ冒頭に戻る。

俺は三歳になったのだ。誕生日プレゼントに親から小さな子供用のギターを買ってもらった。俺はギターを持ったときの感触が忘れら

れない。ネットクに指がぴつたりあったのだ。俺は父からギターを教
えてもらっていた。俺が父さんにコードを教えてもらった時、一回
で覚え弾いたときには父さんと母さんは驚いていた。「うちの子は
音楽の天才だ」とか言っただけで泣いてたっけ。

俺は最初指が小さくてさらにやわらかくて弾くのに苦労したが、今
一曲は弾けるようになってる。ここまですごい大変だった。

さらに時は流れ俺は4歳。今日から幼稚園へ通うことになった。

「うう、無駄に緊張する」

「お前、そんなんじゃないぞ」

「そうだけども、あまり人と触れ合ったことないからさ」

「梓ちゃんによく遊んでるじゃないか」

「・・・もっとうい、いつてくる」

「おう、がんばれ」

この父親は俺を応援してるのかからかかってるのかわからない時がある
「今日からみんなで楽しく遊びましょう」

「・・・はーい」

みんな元気だな。まあいいか、みんなは所々で遊び始めてる。

「なにかないかな?・・・ピアノでも弾こう」

俺は先生の下へ歩いて行き、許可を取る

「先生、ピアノ弾いていいですか?」

「えっ?空くんはピアノに興味があるの?」

そうくるか

「ううん、いつもはギターだけどたまにはほかの楽器も言いかん
て」

「空くんおもちゃのギターで遊んでるのか?」

信じてない・・・はあ

「ピアノ使ってますか・・・?」

「いいわよ、先生が教えて上げる」

何で教わらなきゃいけないんだよ

「は、はあ」

ここにあるのはピアノじゃなくてオルガンだな・・・どっちでもいいか

「まずはドか」先生、弾けるんでいいです」・・・？」

俺は手始めに小犬のワルツを弾く

「〜」

回りはこちらに注目している

「〜」

パチパチパチパチ

いつの間にか隣のカラスからも人が集まってきていた。

「君すごいね〜えっと・・・」

「空、春山空」

「空くんだね。私は平沢唯です。よろしくおねがいします」

「私は真鍋和です。よろしくお願ひします」

「げ、原作キャラ二人とのまさかのエンカウント

「唯ちゃんに和ちゃんだね。よろしく」

そこへ先生が割り込んできた

「三人ともよく言えました。それより空くん上手だね、どこかで習ってるの？」

いいのかよ。てかさっちのほづが褒めるところだろ

「独学」

俺がそういうと先生の周りの空気は沈み、先生は部屋の隅に行ってしまった

俺はその後みんなにもみくちゃんにされた事は言うまでもない。

そして二年後、俺が小学校に入学してから数ヶ月がたった頃

「えっ？アメリカへ行く？」

「そうだ。でだ？お前は私たちと一緒にアメリカへ行くか、それとも日本に残るか。どっちにする」

どっちでもいいんだけど・・・俺がいると仕事の邪魔になるよね

「俺がいても仕事の邪魔になるし、俺は日本に残るよ。」

「そうか。じゃあ早速荷物をまとめろ。」

「えっ？」

「お前梓ちゃんちに行くことになってるから」

ふくん。梓んちね・・・

「ええええええええ！！！」

「そんな大きな声を出すな。せつかくの声が出なくなるぞ」

ああ、そうだな

「向こうはいいって？」

「もちろん」

.....

「はあ、わかったよ。いくよ。行けばいいんでしょ」

「おお、さすがわが息子！」

そういつて抱きついてくる親父。俺は横によけて足払いしてかわす

「そういうことは母さんにやってやれ」

「・・・そうだな」

ええええええ！！まじで落ち込んでるよ・・・はあ〜とにかく用意するか

そしてついたよ中野家・・・諦めよう

いまだに諦めがつかない俺だった

「おじやましま〜す」

「違うでしょ。今日からうちにすむんだからただいまでしょ」

「・・・・（この母親苦手なんだよな〜）た、ただいま」

「おかえり、空くん。空くんの部屋も用意したからね」

「あ、ありがとうございます」

この勢いにはいつもまける

さてどんな部屋かな。俺は階段を上り始める

トントントントン

「ここか・・・」

隣は・・・梓の部屋じゃん

「まあいいか」

俺は扉を開く。広いな・・・それが感想だった。しかも防音・・・

家とあまり変わらないか

「この辺りを散歩でもするか・・・」

トントントントン

俺は階段を降り、遙さんに一言伝えてから外に出る。

外は晴れ、気持ちのいい散歩日和だった。

「う〜ん、気持ちいい」

俺は背をいっぱい伸ばす。

俺が少し歩くと女の子が一人座り込んでた・・・いや、転んでいた

「どうしたの？」

「えっと・・・その・・・足挫いちゃったみたいで動けないんです。」

「よし、つかまれ」

女の子はすぐつかまってくれたのでおんぶして家まで連れ帰ろうと

思った。・・・道を知らない・・・orz

「ねえ、場所わかる？」

「は、はい!!」

俺が女の子の案内道理、歩いていくと一つの家へたどり着いた。

ピンポン ピンポン

すると中から・・・唯が出てきた。唯の家だったのか・・・

唯とは小学校が同じでクラスも同じだ。

「どうしたの空くん?・・・憂どうしたの!？」

「しー!ねてるんだから。転んでたからつれてきた」

俺はベットまで唯の妹を連れて行って寝かせた。

「じゃあ帰るからな」

「うん、ありがとう」

「また明日」

「うん!」

俺は唯の家を出て、中野家へ帰った

第二話 小さい頃2

「ただいま」

「お帰り、お兄ちゃん!!」
ギョ

俺が中野家に帰ると梓が抱きついてきた。一瞬よろめいたが、そこは気合で何とかした。梓は結構前から俺のことをお兄ちゃんと呼んでくれるようになった。俺としては嬉しい限りなのだが、さらに抱きついてくるといふこともあり理性が飛びそうになったことも多々あった。今ではもう慣れているが。

「ただいま梓」

俺は梓の頭をなでる。梓は嬉しそうに目を細める

「エへへへ」

「おか・・・お邪魔だったかしら?」

「あなたは小学一年生の俺と幼稚園生の梓に何を期待してるんですか!!」

「うん・・・純粋な恋愛?」

何言ってるんだかこの人は

「もういいです」

「あらそう?残念ね」

まじで苦手だこの人・・・

俺は階段を上り、自分の部屋に行く。この部屋は防音だからいつでもギターを弾くことができる。

俺のギターはかなり上達していた。年が大きくなるにつれ弾ける曲も増えてきて、今ではほとんどの曲が弾ける・・・小学一年生でギター完璧に弾けるとかwwwある意味怖いな

コンコン

ドアがノックされた・・・誰だろう?

「どつぞ」

「空くん、あなたのお父さんから電話よ」

「父さんから？」

「まあでてみるか・・・」

「もしもし」

『おお、空か』

「どうしたの急に？」

『実は頼みがあつてな。いま紀美さんから電話があつて、友達の結婚式で曲を演奏するから来てほしいとのことだったんだけど・・・』
「母さんが行けないから行けてんだろ」

『ああ、頼む！おまえDEATH DEVILの曲は大抵弾けるだろ。頼むこのとおり』

「はあ、わかった。で結婚式はいつ？」

『今日、近くにある玉式会場で』

「こいつ今なんていった？今日だと？」

「今日？」

『ああ』

「バイバイ言ってくる」

『たのむ(TOT)ノ』

「気色悪！」

俺は遙さんにそのことを伝えると「実は私たちも行くところだったのでよ」と言っていたのでギターをギターケースに入れもち、一緒に会場へ向かった。

俺が会場に着くと、すでに人がたくさん出入りしていた。

俺は控え室に行き、皆さんに挨拶をすることにした。

「皆さん、春山空です。よろしく願います」

「空、来てくれて助かったよ。」

「いえいえ紀美さんの頼みなら仕方ないでしょ、両親が世話になっ

てるし」

「紀美！この餓鬼、ちゃんと弾けるんでしょうね」

が……き……だ……と……

「まあまあ、さわ子落ち着きなってる」

さわ子……この人が……へへ

写真に収めてやる

「まあいいわ。けどあしひつぱらないでね」

「紀美さん何を弾くんですか？」

「ラヴだよ」

「って無視するな！！」

うるせえな

「わかりました、後この人に黙ってもらってもいいですか？」

「ふん、がきができるもんならやって……どこいった？」

俺は縮地を使つてさわ子の後ろに回りこむ

俺はさわ子の首に手を突きつける

「黙ってもらえませんか？」

「は、ハイ」

「すごい、紀美が言つてた事は本当だったね。お姉さん感動しちゃった」

ドラマの……名前知らないorz

「いつ見てもすごいね、アンタ本当に人間？」

「人間ですよ紀美さん！！」

「ごめんごめん。そろそろ行くよ」

「……おう(はい)」「」「」

第三話 小さい頃3 外国へ

「じゃあみんな、とばして行くよ」

「「「おう」「」」」

「あ、ヴォーカルは空で行くから」

「えっ？」

「おい、なんで私じゃないんだよ」

「落ち着け、何なら二人で歌うか？」

「だから、私は何でこんなのと歌わなきゃいけないんだよ」

『新婦とともに青春を歩まれたバンド D A E T H D E V I L の入場です。なお、今回は特別編成でお送りいたします』

「ほらいくよ」

「ちっ」

話に入れない・・・

「てめえーら、飛ばしてくぜー」

「「「おー」「」」」

ザワザワ「あれ、こどもよね」「きゃかわいい」

・・・かえろうかな T A T

「「甘い言葉にご用心 W O W

あんまそんなの慣れてない

かなり警戒注意報 W O W

だけどころやら裏がない」「」

げげ・・・浮いてるよ

（（（うまい！！）））

俺にさわ子が小声で話しかけてきた

（アンタ今から一人で歌いなさい）

（・・・わかりました）

何でだろうと思いつながら一人で歌うことに集中する

「ちょっと高めの理想論wow
余裕ぶって見下ろして
できる振りして無理してwow
ああ 強がって

計算してgetの予定
振り回されるfail
でも

恋に落ちちゃ負けて嘘さ
本当は負けじゃない

もう小悪魔より誘惑より
マジでマジで天使になりたいよ
愛の味はどんなって言うけど
もうすぐわかりそう

シンプルすぎるほど
自分に正直な欲望
愛の未来をちょうだい」

く ジャーン

パチパチパチパチパチパチパチ

俺たちは舞台裏へ戻った。

「さすが空だな」

「いえそんな事は、俺は戻ります。待ってる人がいるんで」

「ああ、じゃあな」

俺は遙さんたちがいるところへ戻った

「お兄ちゃん！ん！！とつても上手だったよ」

「「本当につまかったぞ（わ）」「」

「ありがとうございます」

「僕たちよりうまいんじゃないか？」

「そんな、俺はまだまだです。でもいつか必ず追い抜きます」

「ハハハ、がんばれよ」

「がんばってね」

「ありがとうございます」

俺たちは岐路へついた

あれから3年後

俺は4年生

梓は3年生になっていた。

あるとき親父から電話があつて、今すぐイギリスへこいと言われた。俺は学校を転校することを伝えると女子のほとんどは泣いてくれた。男子は半分以上がやったと言う顔をしていた。まあ自分で言うのもなんだけど俺結構もてていたからな。帰り道唯の家にこいと言われて、唯の家に行くと唯、憂ちゃん、和がお別れ会を開いてくれた。ありがとうみんな。中野家の人にもそのことを伝えると、梓が泣いて部屋に引きこもってしまった。俺は梓の部屋に行きドアを開ける。・があかない。鍵を閉められたようだ。俺は能力で内側から鍵を開けて中に入った

「どうして、鍵をかけた……といたの……に……」

「俺にできないことはないんだよ……ごめんな、いきなりで」

「うん。お兄ちゃんにも理由があるんだよね……ごめんね、いきなり泣き出して心配かけちゃって」

「みんなのところへ行こう」

「うん……」

俺はまた必ず戻ってくる心で誓った

飛行機搭乗から18時間後・・・

ついについたイギリス

「おお、待ってたぞ」

父さんが走ってきた

「実は、お前にギターを教えたいという先生がいるんだよ」

「本当！父さん！」

俺は内心びっくりしていた。何か裏があるんじゃないこと思った・・・

・やっぱり裏があった

「女子小学校に通うのならという交換条件つきだがな」

女子小学校・・・小学校で女子校とかまじかよ。別にいいけど

「わかった。がんばって見るよ」

「じゃあ伝えてくる」

俺はまさかの女子校ライフを送ることになった。

「今日から転入生が来ました春山空くんです」

「男！！」とか「なんで！」とか「かつこいい」という声が多く聞

こえる。最後のは嬉しかった

「日本からきました、春山空です。ここに来た理由はここの校長が

「共学にするかもしれないから、ために入って見て」見たいな感

じで入りました。特技と趣味は楽器を弾くことです。よろしくお願

いします」

『キヤーキヤー』

これが黄色い声と言うのだろうか・・・だんだん苛ついてきた。

「みんな静かに。空くんの席は3列目の一番後ろね」

「はい」

俺は指定された席に座る

今まで気づかなかつたが俺英語喋れてる。それにしてもこの学校日

本人多いな、三分の二くらいは日本人なんじゃないの？HRが終わり外を見ていると、周りにたくさん女の子が集まってきて俺に質問して来た。周りではいろいろな言語が飛び交っている。あまりよく聞き取れない、てか俺そんなに万能じゃねえし。

「質問するなら一人一人言え！俺の頭が混乱する！！」
俺は耳で聞き取れた言語でいう。
すると回りは静かになる

「すいません、私の名前は南静香。学級委員長です」
純日本人だな。日本語かな

「質問は？」

「えっと、誕生日と血液型と得意な楽器をできれば英語で答えてください。ここにいる人はみんな英語を喋れますので」

「わかった。俺の誕生日は8月7日。血液型はO。得意な楽器はギターだ、まあ何でもできるけど」

すると一人の女の子がどこからギターを持ってきて
「弾いてくれませんか？」

と、聞いてくる。別に断る理由もなかったので、okした。

「楽譜ない？」

「あります」

「みせて」

「はい」

彼女が見せてきた楽譜は翼をくださいだった。

「

今 私の願い事が

叶うならば 翼がほしい

この背中に 鳥のような
白い翼 つけてください

この大空に翼を広げ飛んで行きたいよ

悲しみのない自由な空へ 翼はためかせ・・・行きたい
」

パチパチパチパチパチパチ
すごい拍手だった

「ありがとう」

「どういたしまして」

俺が弾き終わり、ギターを返すと先生が来て授業を開始した。

一時間目が無事終了して二時間目になったとき一人の女の子が話し
かけてきた

「そ、そらくん。い、一緒に音楽室行こ／＼」

何で赤くなってるんだ？

「君は確か・・・ギターを貸してくれた」

「いちごです」

「いいよ、いちごちゃん。」

「・・・／＼」

俺は音楽室へ向かった

第四話 小さい頃4 音楽室で（前書き）

知っている人は知っているだろういちご！前話からの登場で、海外に留学中と言う設定は、作者の想像です。出来たら感想ください

第四話 小さい頃4 音楽室で

俺はいちごちゃんに連れられて、音楽室へ来た。音楽室に入ると、感嘆の声を漏らしてしまいそうな、光景があった。ギターやピアノなどの楽器がたくさん在ったのだ。

「今日も学園祭に向けての練習をします。各自、練習場所に行ってください」

「先生、転入生がいるんですけどその子は何をすればいいんですか？」

「そうね、何ができる？」

「たいていのことはできます」

「それは心強いわね。でも、強いて言うならなにかしら」

「ギター&ヴォーカルです」

そういうと先生は目にもとまらぬ速さでこっちへ近づいてきたので、俺は後ろに飛んでよけてしまった。

「あら、私の速さに反応するなんて。驚かせてごめんなさいね」

「すごい」「先生の早歩きをかわしたよ・・・」

「なんですか？ いったい」

「本当は普通に歩いて行くつもりだったのだけれど・・・癖で早歩きになっちゃった」

「つけても駄目です！」

「そうね・・・それよりギターとヴォーカルやってくれない！？ いまギターとヴォーカル出来る人が一人もないのよ」

「いいですよ」

「ありがとうございます」

「曲は何をやるんですか？」

「曲名は翼をください」

「翼をくださいかぁ・・・それだけ？」

「はい」

「……やる気あんのかああ!!」

「冗談よ冗談」

「で、ほかの曲は？」

「君と見た海と明日へよ」

「ずいぶん普通な曲だな……まあいいか。楽譜ちょうだい」

「どうぞ」

「勝手に練習してるわ」

「ええ」

俺はギターの置いてある場所へ行きチューニングを始めた。俺は絶

対音感なのだwww

チューニングが終わり、俺は楽譜を弾き始める

20分後

「大体出来たな、一応先生に聞かせるか……」

「先生出来ました」

「えっ？もう出来たの？」

「大体ですけど。一応聞いてもらおうと思ひまして」

「わかったわ、弾いてちょうだい」

先生の後ろにはクラスの人がたくさんついてくる……そんなにす

ごいことでもないのにな

「」

今私の願い事が

叶うならば翼がほしい

翼はためかせ行きたい

「」

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ

翼をくださいだけでこれだけとは・・・どんな反応になるのかな？

「すごい完璧じゃない。次も弾いて」

先生は先生で楽しんでるし・・・

暑い八月の海で

風に体包まれて

眩しい水平線を眺めてる君

いつまでも輝いてる

パチパチパチパチパチパチパチパチパチ

次ぎ行くか

青い風に 吹かれて

明日を思う ぼくらがいる

遙かな風を 受けて

心ふるえ 熱く燃える

輝く明日へと 走って行くよ

パチパチパチパチパチパチパチパチ

「もう完璧！ほかの人たちで出来る楽器が在ったら教えて上げてちようだい」

「「「「よろしく」」」」

何でこんなことに・・・まあいいか

「わかりました」

キーンコーンカーンコーン

「みんな楽器を片付けて今日は終わりよ

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「

第四話 小さい頃 4 音楽室で（後書き）

いつになったら原作に入れるのやら・・・orz
T A T

第五話 小さい頃5 学園祭とその後

ついに学園祭の日が来た。俺はギターのチューニングを終え舞台裏にいる。てかこの学校広いな・・・

「よし、みんな張り切って行こう!」

「……おー!」「」「」

俺は一つの視線を感じ視線のほうを見るといちごちゃんがこちらを見ている

「どうしたのいちごちゃん?」

「なんでもない。それより私のことはいちごって呼んでくれ!」

「わかった。いちご」

「ありがとう」

「おお、いちごが空にアタックしてる!」

「ち、違う。美紗はなんでも勝手に決め付けるんだから」

「いいじゃん別に、嫌じゃないんでしょ」

「ちよつとは恥ずかしいけど・・・嫌じゃない!」

彼女の名前は音羽美紗。いちこの親友らしい・・・それにしてもいちごも変な事言うなよ

『では4年1組の発表です。しずかに聞きましょう。では、4年1組の皆さんよろしくお願ひします。』

ハードル上げたよ

「……はい!」「」「」

そして俺たちの演奏が始まった

）???

俺たちの演奏が終わると、講堂は大きな拍手と歓声で包まれた。俺は胸に何かを感じるものが在った。こういうのもいいな・・・俺たちの学園祭は幕を閉じた。

俺は帰る際に近くの楽器屋によつた。そしてここの店長こそが、俺にギターを教えてくれる人だった。

「はじめまして。僕の名前は山中太一よろしく」

「俺は春山空です。ギターのご指導よろしくお願いします」

そんなこんなで俺は太一さんの指導を受けるのだが・・・太一さんはギターを持つと性格が変わり、かなりのスパルタぶりだった。俺はその指導に耐えているいろいろな技術を身につけていった。

学園祭から2年がたち、俺は小学校を卒業した。俺はかなりモテて、結構告白されたが全部断つた。俺はもうすぐ日本に帰るつもりだ。師匠（太一さん）が卒業試験をしてくれて、それに合格したら日本に帰ると言うことになっている。いちごや美紗、南はもう日本に帰つたらしい。なんでも中学は日本の中学へ行くみたいだ。そして今日は卒業試験の日。試験の内容は簡単、課題曲を一週間までに覚え師匠に聞かせ合格を取ることだ。俺はギターのチューニングをして師匠を待っている。

「空くん、よろしく頼むよ」

「はい、師匠!!」

課題曲はDEATH DEVILのラブ。この曲だと知った時は正直驚いた。なんでも師匠はDEATH DEVILが活動している

ときの軽音部の顧問だったらしい。俺がその人たちと知り合いと言
つたらたいそう驚かれ・・・なかった。だってうちの父さんだけ
でなく母さんも知っていたから、俺が会ったことが在るのくらい少
し考えればわかるだろうと言われた。ちくせう、驚かすつもりだっ
たのに（――；）
く

甘い言葉にご用心WOW

あんまそんなの慣れてない

かなり警戒注意報WOW

だけどどうやら裏がない

ちょっと高めの理想論WOW

余裕ぶって見下ろして

出来る振りして無理してWOW

ああ、強がって

計算してgetの予定

振り回されるfail

でも

恋に落ちちゃ負けて嘘さ

本当は負けじゃない

もう子悪魔より誘惑より

マジでマジで天使になりたいよ

愛の味はどんなって言うけど

もうすぐ分かりそう

シンプルすぎるほど

自分に正直な欲望

愛の未来をちょうだい

」

「……………」

「……………」

長い沈黙が流れる……

「……………合格だ」

「や、やったー!!」

合格できたよかった。これで日本に帰れる。

「師匠、俺日本に帰ることにします」

「そうか、またいつか会おうな」

「はい、今までありがとうございました師匠!!」

俺は頭を下げる。今なら中野拓也さんと遙さんに負けない。父さんと母さんにはもう勝てる!!

俺は家に帰り帰りの準備をした。すると父が来て

「おい、空!? 帰るのか!? 父さんはさびしいぞ」

「いつも母さんとイチャイチャしてるくせに何だよ」

「ふ、ふん……お前ここに住め」

「ここって……マンション?」

「ああ、父さんがお前が日本に帰るときのためだけに作った」

「バカだろ」

「そんな事言わないでえ。それに、お前が今年から行く桜ヶ丘中学校も近いぞ」

「ん! ならいいか」

「よし、そういうことで最上階の25階は全部お前の部屋だ」

この父、俺のためなら何でもしそうな勢いだな……これでも大企業の社長かよ……まあいつもは世界中を回って歌手活動してんだけどな……

「あと、お前に仕事がいুকかも知れないから」

「……………ナンダト!」

「な、何で片言なんだ? まあ時期にお前には会社をついでもらうか

らな」

「はあく、わかったよ。俺の頭脳なら大丈夫だと思っつから」

「よろしくな」

俺は翌日にイギリスをたち、日本へ向かった

第六話 小さい頃6 不良!?

俺はマンションに行き、荷物を置くとすぐにベットに倒れこんだ。時差ぼけが酷くとても眠かった。ベットに横になるとすぐに睡魔に襲われ、深い眠りについた。

翌日・・・

俺は桜ヶ丘中学校の職員室へ向かった。俺は自分の担任の先生を呼び、少し話してから教室へ移動した。俺は先生の紹介で挨拶をする。教室には唯や和。俺の元クラスメイトだった人もいる。

「えっと、始めましての人と久しぶりの人もいます。春山空です。いままで、イギリスへ行っていました。これからよろしくお願いします」

俺が挨拶をすると予想通りの返事が返ってきた。

「かつこいい」だの「帰国子女」だの、いちいちうるさい。

俺は指定された席に行き、HRが終わるのを待った。HRが終わりは俺は教室から逃げ出し、屋上へ行った。俺はあまりうるさいのは好きじゃない。でも、音楽は別だよ。

屋上に行くとき先客がいた。

「おう、君が今日来たって言う転入生？」

「そうだけど？」

何かこいつから不良&お笑い魂を感じる

「まあ座れよ」

「ああ、そうさせてもらう・・・ってそれ俺のセリフだよ!」

「おっ! ナイスノリッ」

「いやー」

お羅たちはお互いに目を合わせて笑いあつた

「ハハハ、お前とは気が会いそうだな。俺は春山空よろしく」
「俺は池上大和だよろしく」

数日後……

『もしもし空か!?』

「どうしたの父さん?」

『落ち着いてよく聞けよ』

落ち着くのはアンタだろ

「で?どうしたの?」

『お前に妹が出来た!』

「ふくん……マジで!?」

『ああ、おおマジだ。名前は千香だ。今度の夏休みにでもこい』
「わかった」

Pr i

「お父さんなんだって?」

「いや、妹が生まれたらしい」

「まじか!今日はお祝いだな。空の奢りで!!」

「何でそこで俺のおごりなんだよ!」

「ケチケチすんなよ!金たくさんあるんだから」

「まあいいか。行くぞ」

「おー!!」

お調子者だな……こいつは

こんな日々がいつまでも続けばよかった。けれどあることがきつかけで、だんだん平和が壊れていく。

「何食べようかな?」

「ずいぶん楽しそうだな」

俺ら二人がそんな会話をしているときだった。

「ちよつとやめてください」

「いいじゃねえか。一緒に遊ぼうぜ」

声のしたほうを見ると何人かの男が一人の女の子を囲んでいる。しかもその女の子と言うのが知り合いだからびつくりだ。

「大和、鞆持つてくれ。あいつ俺の友達なんだ」

「いや、空俺も行くぜ」

「足ひつぱんなよ!!」

「俺を誰だと思つてんだ!!」

俺たちは走り出した。

「てめえら、空のだにてえだしてんじゃねえ!!」

俺は女の子を掴んでるやつを後ろから蹴飛ばす

「よお、久しぶりだないちご。白馬に乗つてない王子様参上だ!」

「てめえ、やりやがったな!オラ」

ブン

男の殴りはむなしく空を切る。俺はそのスキに男の懐にもぐりこみアップパーをプレゼントする。男は2〜3M吹っ飛び気絶する。

女の子　いちごに近寄る

「怪れないか?」

「危ない!!」

いちごが叫ぶ、後ろから一人の男がナイフを持ち突っ込んできた。

俺は右にずれ男の手からナイフを落とす、リアアットを決める。

「たく、感動の再開なのに空気によめねえやつらだな!!」

「ちっ!やつちグフア」

「俺を忘れてもらつちゃあこまるね」

大和が飛び蹴りをかましたようだ。するとどこから男が近づいてくる。

「てめえらこんな二人に手こずつてんのかあ?」

「す、すいません親分」

「ふん」

親分と呼ばれたやつらの後ろから鉄パイプなど凶器を持った男が20人くらい出てくる。

「ちっ！大群のお出ましか」

「どうするよ空」

どうするか。俺一人なら大丈夫だよな

「じゃあ、大和いちご連れて安全な場所まで避難してくれ」

「お前はどうするんだ？」

「やつらを叩きのめす」

「空・・・気をつけて。それと・・・ありがとう」

「ああ」

「てめえら何こそ言ってたんだ？」

「いや、お前らを俺が倒していいか確認とってただけだよ」

「ふ、ふはははは！」

「お前一人でこの人数に勝てるだけでも？」

「なあ、平行世界って知ってるか？」

「？パラレルワールドのことだろ」

「大正解だ。それがもしあり、しかも自由に行き来出来る人間がいたとしたら？」

「??????」

「親分やつちまいましたよ」

「そうだな、いけてめえら」

「分からないようだから見せてやる」

男たちは鉄パイプで殴りかかってくるが避けない・・・いや避ける必要がないのだ

俺はすでにそこにたっていないから。そこにいるのは平行世界の俺で本当は

「お前らの親分の裏にいる！！」

「なっ！！いつのまに！！」

「これは平行世界へ移動して、攻撃を避けたんだ。まあ見せてやる」

親分と言われた男以外がすべて倒れる。平行世界へ移動して気絶させたのだ。

「な。なにが」

「説明する必要はないな。さらばだ」

俺は親分を気絶させその場を立ち去った。

俺は大和といちごと合流していた。

「怪我は・・・してないみたいだな」

「まさか心配してくれた？」

「あ、当たり前だろ」

「ありがとうな大和。いちごを守ってくれて」

「大和くん、ありがとう」

「いえいえ」

「空もありがとう。また助けてもらっちゃったね」

「また？空何かあったのか？」

「立ち話もなんだから、あそこのファミレス行こう。俺がおごる予定だったし」

「やったー!!」

「で、でも」

「いちごちゃん。こいつに遠慮は必要ないよ。なんたってこいつは

次期は「ワーワーワー」・・・どうしたんだ空？」

（いちごには内緒だ）

（なんで？）

（なんでもだ）

（わかった）

「なにしてるのふたりとも」

「なんでもないよ」

「行こう」

「またって言うのは俺たちがイギリスへ行ってる時にいちごが誘拐されたんだ。そんとき俺が助けに行っただ」

「いちごちゃんかわいいもんね。てか空はそんな時から強かったんだな」

「空は私を助けるために死ぬ気であいつ等と戦ってくれた」

「やつらは銃を持ってたからな（あの状況で能力使うわけにも行かないしな^^）」

「空は血まみれになりながら私を助けた。私を誘拐した人たちはつかまった」

「まあ、一番面白かったのは次の日のいちこの顔だな」

「空ったらあんだけ銃撃浴びたのに次の日には傷一つなく、学校に登校して来たの。ビックリよ」

「まあ小さいことは気にするな」

「ご飯も食べ終わり俺は会計に行った」

「会計払ってくるよ」

「ああ」

俺はブラックカードで会計をした。よくこの店に来るので、店員はあまり驚いていなかった。

「いちご家どこだ？送ってくよ」

「いいよ」

「たく四年生の時とは違ってクールになっちゃって。でも送ってくよ」

「分かった」

「大和はどうする？」

「うーん、俺はよりたいたいところあるから」

「そうか、じゃあな」

「ばいばい」

「ばいばい」

俺たちはいちごの家に向かって歩き出した

第六話 小さい頃6 不良!?(後書き)

原作が・・・遠いTAT

第七話 小さい頃7

「空、携帯持つてる？」

「もってるよ」

「そ、その・・・アドレス交換しよう／／／」

「懐かしいいちごだ・・・」

「う、うるさい！！／／／」

「顔赤くしながら言っても、説得力に欠ける」

俺は携帯を出して赤外線アドレスを交換した。

「そういえばいちごの家ってどこ？」

なんかうちに近い気がする・・・

「マンションだよ。」

「ふん、どこの？」

「ここから見える一際高いマンション」

「・・・マジで？」

そこは俺の父さんが立てたマンションだった・・・そして今俺が住んでいる・・・

「うん。空はど？」

「俺はそのマンションの最上階」

「・・・ええええええええ！！！」

「耳元で叫ぶなよ！！顔に似合わずでかい声出すなあ」

「ど、どういこと！？」

「だからかわいい顔に似合わず大きな声出すってことだよ」

「か、かわいって・・・／／／」

「おい、もどってこーい」

「はっ！！・・・その制服よく見たら・・・空って桜ヶ丘中学校校？」

「あ？そっただけど何で？」

「私も桜ヶ丘中学校だよ」

「ふうん」

「反応薄いね・・・」

「いや、かなりキャラ変ってる気がするなあって」

「き、気のせいだとおもう」

「いきなり戻った!」

「気のせい!」

「そういうことしておくよ」

「・・・」

「ついた」

俺たちは話しをしているうちにマンションへ入っていた。

「じゃあわたしはここで」

「ばいばい」

「ばいばい」

俺はいちごを見送り自室へ行く。見れば見るほど広いな・・・

翌日・・・

「バンド?俺は無理だ。楽器できねえし」

「そうだよな・・・」

俺はバンドを結成するために大和を引き込もうとするが失敗に終わった。

「でも教えてくれるって言うなら入ってやらねえ事もねえぞ」

「よし、一人確保。で、お前はなにやりたいんだ?ヴォーカル以外で」

「ギターだろ。かつこいいし」

「ギターか、じゃあリズムギターかリードギターどっちがいい?」

「・・・まったく何か分からない」

「リードギターって言うのはソロとかを弾くいわば中心的な存在で、リズムギターはギターストロークやカツティングによる奏法が主体となる。つまり簡単に言えばリズムを作っていくパートだ」

「うーん、空はどっちなんだよ」

「俺はリードギターだよ。」

「そうか、なら俺はリズムギターをやる」

「分かった。後はキーボード1人、ドラム1人、ベース1人、だな」

「張り紙でも作るか？」

「ああ」

「これで完成」

張り紙の内容は音楽に興味がある方や音楽を楽しみたい方でキーボード、ドラム、ベースをやってくれる方募集。初心者も大歓迎という内容だ。

「集まると思う？」

「さあね、今日はうち来て練習するか。ギター貸してやるよ」

「ああ、ありがとう」

「いつ来てもここはすごいな」

「そうか？」

「おじゃまします」

俺たちはスタジオに向かった。ここは完全防音なので、気兼ねせずに練習が出来る。

「まずはエレキギターとアコースティックギターどっちがいい？」

「エレキギターー!!」

「即答かよ。まあそれがいいだろう」

俺は大和にエレキを渡す。俺が渡したのは梓が使ったのは楳が使ったことになるであろうフェンダー ムスタングだ。

ちなみに俺がつかっているのはギブソン SGスペシャルだ。

「これがエレキギターか!!」

「ああ、それはフェンダー ムスタングって言う種類だ。」

「なあ、さっきから気になってたんだけど、あのギターってなに？
二人用？」

「あれはギブソン EDS - 1275っていつてれっきとした一人用だぞ」

「へえー。それよりさ早く教えてよ!!」

お前が聞いてきたんだろ!!

「ああ、まずはコード覚えるぞ」

「おー!!」

数時間後

「おまえって・・・すごいな」

「そうか？」

「これだけやってCとCmしか覚えられないとか、オワタノ」

「なんだよさいごの・・・俺がんばる!!」

「そうか、それじゃあそのギターやるよ」

「まじで？でもギターって高いんだろ？」

「いいよ、うちにたくさんあるし」

「そうか、じゃあ帰るな。ばいばい」

「おう、また明日」

大和は帰っていった

第七話 小さい頃7 (後書き)

原作に入りたい!!と言いながらも長くなりそうな中学校編・・・

Orz

感想待ってます？

第八話 小さい頃 8 バンド（前書き）

なんか話の内容が、この題名じゃ収まり切らない気がする・・・題
名後二つくらい必要な気が・・・

第八話 小さい頃8 バンド

翌日

俺が教室へ行くと、違うクラスの女の子が俺を訪ねてきた

「あ、あの・・・べ、ベースやらせてください！！わ、私べ、ベースを前やっててまたはじめようかなと思って・・・駄目ですか？」

何で泣きそうなんだよ

「いいよ！大歓迎。後はドラムとキーボードだな」

「あ、あの・・・それなら私心当たりが在るので誘って見ます」

「本当か！？頼む！」

「は、はい！！」

放課後

「空さん！！」

「君は朝の」

朝来た女の子と、女の子と男の子が一人ずついた。

「あの・・・二人ともOKしてくれました」

「そうか。そういえば自己紹介がまだだったね。俺は春山空。パートはリードギターだ」

「俺は池上大和。パートはリズムギターです」

「いつのまに出てきたんだよ。」

「わ、私は三原千里といいます。パートはベースです。で、こっちが」

「山中美穂・・・パートはキーボード」

「俺は斉藤大河。パートはドラムだ。よろしく」

「自己紹介も終わったし、俺の家行くか」

「でも私たち楽器もって来てない」

「千里ちゃん・・・心配するだけ無駄だよ」
「えっ？」

大和・・・黙ってる

「行くか」

「おう」

俺はマンションに向かって歩き出す

「で、でけえ。」

「こっつて、高級マンションじゃ・・・」

「早く行くぞ」

「・・・はい（おう）」

俺は自分の部屋へ行き、スタジオの用意をする。

「すげー。このドラム！！超高いやつじゃん」

「このベースも！」

「このキーボードも・・・」

興奮しすぎだろ

「チューニングを各自始めてくれ。適当に翼をくださいを弾くから」

「・・・おう（はい）」

「大和は俺と練習な」

「分かったぜ」

俺はギブソン SGをギターケースからだしチューニングを始める。
横では大和もムスタングのチューニングをしている・・・帰ってか
ら練習したらしく、手には絆創膏がたくさんはられている。

「まずは「俺全部コード弾けるようになったんだぜ！！」・・・ま
じで？」

「おう」

「じゃあ、まずC、Cm、Dm、Em」

ジャーン ジャーン ジャーン ジャーン

「……………」
弾けてるぞ……………」
「じゃ、じゃあB m F、B 7、F M 7」
ジャン、ジャジャン、ジャン、ジャーン
……天才だ……昨日のはなんだったんだ……
「お前昨日のはなんだったんだよ……」
「いやね、寝ないで練習したら出来るようになった」
「だから、屋上で熟睡してたのか……」
「ま、まあまあ」
「これ弾いて見る」
「」

「よし、一緒にやるぞ」
「えっ？まだ無理だって」
「みんな一回合わせてみよう」
「おう、足ひっぱんじゃねえぞ空……」
「早く……弾きたい！」
「がんばりましょう……」
「おい大河……！俺を誰だと思ってる」
「えっと……その……」
「ほら、大和もなんか言ってるやれ」
「そ、空はうまいんじゃないかな……（棒読み）」
「何で棒読みなんだよ……まあいいか。はじめろ」
「1、2、3、4」
「」

いま私の願いごとが
かなうならば 翼がほしい

俺らは声が出なかった。初めて合わせたには良すぎる

大河のドラムは走りすぎてないし、美穂のキーボードは滑らかに滑ってるし、千里のベースは細かいテクニックスも完璧だし、大和と俺は上手いし・・・バンド結成確定だな・・・うん

「すげーよ」

「・・・完璧」

「すごい・・・」

「・・・」

「最高だ・・・」

再び沈黙・・・

沈黙を破ったのは大和だった

「な、なあば、バンド名決めないか？」

「おっ！いいな」

「・・・きめよう！！」

「カッコいい名前がいいな」

「・・・そうだ」

「フェニックスって言うのはどうだ？」

「フェニックス？」

「不死鳥って意味だ。終わる事のない不死鳥」

「いいなそれ」

「・・・かつこいい」

「うんうん」

「じゃあ決定だな」

「よし、俺らは空をリーダーとしてここにフェニックスを結成する」
「イマナント？オレガリーダー？」

「俺リーダーかよ！？」

「だって一番上手いじゃん」

「そうだよ」

「・・・ほかに何か楽器出来るの？」

お前ってKY？

「楽器はたいていなら出来るよ」

「じゃあ、後で教えて」

「美穂が教えを頼むくらいだから、かなり上手いんだよ」

「美穂は誰にも教えてもらうことなくここまで上手くなったんだからね」

「それはすごいな」

「と言う事でリーダーは空な」

「……はあくわかったよ」

そして俺たちはフェニックスを結成して活動を開始した。

次の日

「空くん……」

唯は空の席を見ていた……もう何週間もたつのになかなか話せないでいるのだ。空は席にはいず、屋上にいるのだろう。

「唯……今日、空と話して見る？」

和も同じだった。のどかも空とは話せずに何週間も過ぎたのだ。

「そうだね和ちゃん」

放課後……

「大和、今日も練習だ」

「おう」

「空くん!!」

「空!!」

「唯に和か……大和先行っててくれ」

唯と和・・・何年ぶりだろう・・・おじさんくさいな

「おう」

「なんだ？」

「空くん・・・いまさらになっちゃったけどお帰り」

「お帰りなさい」

「・・・ただいま」

唯と和は変ってないな

「ふう〜、なんか疲れちゃった」

「本当。でも、空が变ってなくて良かった」

「えっ？もしかして俺が变ってると思ってた話し掛けづらかったのか

？」

「うん」

「フッフ、ハハハハ。俺は变ってねえよ。变ったところと言えば、顔立ちが少し良くなってギターが上手くなったことだな」

「やっぱり变ってないわね」

「そっだね和ちゃん」

「・・・ハハハハハ」

久しぶりに三人で笑ったな・・・と忘れるところだった。練習があっただ

「俺練習だからもう行くわ」

「練習？なにかやってるの？」

「私も気になるわね」

「バンド。フェニックスってバンド結成したの。その練習。だんだん有名になって行くからこれからこれからの期待あれ」

「ふふふ楽しみにしてるわ」

「バンド？練習」

「じゃあな唯、和。」

「ばいばい空くん」

「さようなら」

俺は練習のために皆の元へ走っていった

「なあ、今度の学園祭でライブやらないか？」

「いいねえ」

「ライブ？」

「講堂借りられるかな？」

「そこは大丈夫だよ。なんとたって空がいるんだから」

「俺頼みかよ！！・・・そっいえば美穂は？」

「そっいえばいないね」

「美穂ちゃんなら、忘れ物したって学校にとりに行っただけ・・・
おかしいなあ、もう帰って来てもいい頃だと思うんだけど・・・」

「俺ちよつと見てくる」

「空・・・俺も行く」

「・・・分かった」

「二人とも・・・怪我すんなよ」

「「おう」」

俺たちが学校へ向かって走っていると、車のタイヤ痕がありその近くに美穂のものと思われるバツクが会った。

「空！」

「行くぞ」

俺らが周りの人に聞くと黒いフェラーリに、女の子が連れ込まれて第二倉庫のほうまで連れていかれたのを見たって言う人がたくさんいた。俺たちはすぐに第二倉庫へと向かった

「もう・・・やめて・・・」

私のからだはボロボロになっていた。男たちに連れ去られた後酷いことをされた。

「ああ？やめてだ？そういわれるともっとやりたくなくなるなあ」
そういつて男は私をまた殴った。

「へっへっへ。今度はその小ぶり体のお披露目と行こうか」
男はナイフを持って近づいてくる

「お願い・・・もう・・・やめて・・・」
「やだね」

男はナイフで私の服を破った

ドン

すると思いつきりドアが蹴破られた。その先にいたのは・・・

ここだな

「空・・・いくぞ」

「言われなくても」

ドン

俺はドアを蹴破った。その先にいたのは、ナイフを持っている男と服が破け、いろいろなところには痣がある美穂とそのほかに数人の男たちがいた。

プチ

俺は頭の中で何かが切れるような音がした。それと同時に俺は声を張り上げていた

「てめえら・・・絶対ぶつ殺す！！」

俺は人の目なんて関係なく縮地で男たちのそばに向かい殴った。顔の形が変わるまで。

その間に大和は美穂を助け出していた。

「てめえ、殺つちまえ！！」

周りから何人ものやつらが来たが俺には関係ない。俺は一方通行を

発動させる。男たちはナイフや鉄パイプで殴ってくるが、すべてが反射して男たちは苦しむ。

「た、頼む！もうやめてくれ！！」

「おめえらは美穂がそうだった時どうしたよ？こうしたんだろ！！」
俺は思いつきり男の顔を殴る

バキボキバキ

変な音がしたが関係ない。俺は殴って殴って殴り続ける。全員を。

・・・俺はこいつらを本気で殺そうとしてるんだな・・・そう思う
が体が言う事を聞かない。

「空、もうやめろ！」

俺は大和に止められ、やっと正気を取り戻す。

俺は美穂のところまで歩いていく

「・・・ビクッ」

震えている。怖がっているのだろう

「・・・すまなかつたな。怖かつたろ。これからは俺を軽蔑してくれたってかまわない。・・・その格好じゃ寒いだろ、これ着とけ」

俺は自分が羽織っていたジャケットを美穂に渡す。

「け、軽蔑なんてしないよ・・・その・・・怖かつたけど、空は私の事助けてくれた。助けるためにしたことなんですよ？」

「ああ」

「だから・・・自分をそんなに責めないで・・・」

「・・・ありがとう」

「よし、空、美穂ちゃん帰るぞ」

pipipi

「大河からだ」

俺は電話に出る

「もしもし」

『空・・・美穂は？』

「怪我が酷いけど無事だ」

『そうか・・・よかった』

「大河・・・おれさあ今こいつらを本気で殺そうとしちまった」
『・・・・・・・・・・』

「俺・・・フェニックスにいても大丈夫なのかな?・・・」

『なにバカな事言ってるんだ! ったりめえだろ、お前がいなかったら誰がリーダーやるんだよ。それよりは早く帰ってこい。学園祭の打ち合わせするぞ』

「ありがとう」

俺たちはマンションへと向かう前に美穂の家へよった。ジャケットを羽織っていると言っても、このままじゃ寒いだろうしそれに恥ずかしいだろうから着替えをするために美穂の家へよったのだ。美穂が着替え終わったあと、俺たちはマンションへ向かった。マンションへついたら大河に殴られた。

「ったく、もつと早く行ってやれよ。美穂の体中ボロボロじゃねえか。顔に傷つかなかった分まじだったけど」

「俺の心配はないのかよ」

「どうせお前は無傷なんだろ。それも返り血だろうし」

「みてたのか?」

「みてねえよ!」

千里に美穂の手当てを頼み、俺たちは先に練習に入った

第八話 小さい頃8 バンド（後書き）

後二つくらいで原作に入れるかな？
感想待ってます

第九話 小さい頃9 学園祭ライブ

時は流れて夏休み

「で、曲は何にする?」

「俺が作曲した、のが二つあるけど」

「空いつのまに!!」

「外国行ってる間かな」

「外国かあ・・・俺も行きたいな」

「じゃあいくか?俺夏休み中に行かなきゃ行けないからさ」

「妹さんが生まれたってやつか」

「てか、連れてってくれるのか?」

「空・・・私も行きたい」

「私も!!」

「じゃあ決定だな」

「それより話し戻そう。空が作った二つの曲入れるとして後はどうする?」

「それじゃあ、作るか!」

「おう」

「イギリスにいる師匠に頼んで、イギリスのいろいろな場所回れるようにして置くよ」

「ありがとう・・・空」

いつもは表情があまり変らない美穂だが今笑った気がした。たぶん気のせいではないだろう。

そしてイギリス

「ついたー!!」

「そんなにはしゃいだと疲れるぞ?」

「空の家って……どこ？」

美穂は冷静だ……あの事件があったから、いつそう仲良くなれた気がする

「俺んちはもうすぐで見えてくるよ」

歩くこと数分

「ここだ」

「お兄ちゃん……誰ですか？」

とつてもおどおどしながら、歩いてくる赤ちゃんがいた……赤ちゃん！？

「まだ生まれて間もない赤ちゃんが歩いて喋ってる……」

マジカヨ……

「おお、空帰ってきたか」

「父さん。この子は？」

「千香だ」

「……」

「その気持ちは良く分かる。でも生まれてきて、数週間で喋れるようになったんだ」

千香は父さんの後ろに隠れてしまっている。

「千香、空は千香のお兄ちゃんだぞ」

「お兄ちゃん？」

「千香よろしくね」

「空、後ろの方たちは？」

「俺のバンド、フェニックスの仲間」

「空の親友の池上大和です。ギターやってます」

「親友じゃないから」

「ひどっ！」

「三原千里です。ベースをやっています。空くんにはいつもお世話になってます」

「山中美穂。キーボードをやっています。空に一度助けもらった……」

「斉藤大河です。パートはドラムです。よろしくお願ひします」
「そうか、空がバンドを・・・こんなところでもなんだから入って
くれ。」

「・・・お邪魔しまーす」「・・・」

「ただいま」

「お帰りなさい・・・空帰ってきたのね！！後ろの方たちは？」

俺たちはさっき父さんに行ったように説明した。

「ちよつと俺師匠に電話してくる」

p u i p p i p p i p p i

『もしもし』

「師匠お久しぶりです。空です」

『空か！帰ってきたんだな』

「はい。それで、例のものは」

『大丈夫。準備万端だよ』

「ありがとうございます。それでは1時くらいに向かいますね」

『おお』

p i

「す、すげえ」

「このバス・・・貸切？」

「ああ。とりあえず観光でもしようと思って、師匠に頼んで置いた
んだよ」

「そういえばずっと気になってたんだけど・・・師匠って誰？」

「山中太一さん。俺のギターの師匠だ」

「えっ・・・？」

「空くんおまた・・・せ・・・」

「お父さん!!」

「美穂じゃないか!なんでここに?」

「……キイテナイゾ?

「親子だったんですか」

「ああ。それより準備が出来たから乗り込め」

「おー!!」

俺たちはイギリスの観光名所をたくさん回った。みんなははしゃいでいた。俺は頭の中で歌詞を考えていた。題名はBest Friend。俺たちにぴったりの歌だ。

俺は紙に歌詞をまとめた。

「Best Friend

君と出会い僕は変わった

あの頃の僕を変えた君がいる

喜び、悲しみを分かち合った日々

今でも覚えている

僕らは出会い 日々を過ごす

笑い 泣き ともに過ごした日に

Best Friend Best Friend

I know · Your my Best Friend

We meet · And, it separates ·

However, our bonds are connected

indeinitely · 「

空なに見てんだ?」

「歌詞が出来たんだ」

「見せてくれよ」

「私にも・・・」

「なになに？」

数分後・・・

みんなは泣いていた・・・って何で泣いてんだよ!!

「そんなに駄目だったか？」

「いや・・・とてもよかった」

「が、学園祭は・・・グスツ・・・これで行こう・・・グスツ」
・・・マジかよ

俺たちは日本に帰国した。

学園祭当日

「みんな・・・最高のライブを作り上げよう!!」

「「「「「おお!」」」」」

『では、フェニックスさんの登場です』

「いくぜ」

「おう」

「はい」

「OK」

「うん」

口々に気合を入れる

「1!2!」

二曲を弾き終わる

「俺たちフェニックスのライブへ来てくれてありがとう」

「キヤーー!!空くくん。こっちむいてえ」

「ここでメンバー紹介です。ギターの池上大和!!」

「今日は俺たちのライブへ来てくれてありがとう!!」

「きやー大和君よ!!」

「ベース。三原千里!!」

「えっと、私たちのライブ。最後まで楽しんで行ってね!!」

「キーボード。山中美穂!!」

「・・・ありがとう」

「か、カツコいい!!」

「そしてドラム。斉藤大河」

「みんな!!ありがとう!!」

「きやー!!」

メンバー紹介も終わったし次の曲行くぞ。と言おうとするとみんなの声に阻まれる

「・・・そして、我等がリーダー。春山空!!」

「きやー!!空様!!」

みんな・・・

「みんなありがとう。次で最後の曲になりますが、次の曲は俺たちの最高の曲です。聞いてくださいBest Friend」

「・・・俺たちの演奏に惚れるなよ!!」

「君と出会い僕は変わった

あの頃の僕を変えた君がいる

喜び、悲しみを分かち合った日々

今でも覚えている

僕らは出会い 日々を過ごす

笑い 泣き ともに過ごした日に

Best Friend Best Friend

I know . Your my Best Friend

We meet . And , it separates .

However , our bonds are connect

ted indefinitely .

)

「みんな！ありがとうー！！」

そして俺たちの学園祭ライブは終わった。

楽しい時は流れるのは早く、学園祭ライブが終わってから2年と少しがたっていた。

第十話 小さい頃10 そろそろ原作突入だYO

「なあ空。お前どこの高校行くんだ？」

「俺は西港高校に推薦もらってるから」

「あの超名門高校!!!.....空?あの.....その.....」

「言いたい事があるなら言えよ!」

「俺桜ヶ丘高校行くんだ」

「へえ〜大和も高校行くんだ」

「だってよ、俺の学力で受かるのはそこしかねえんだよ。来年から共学になるらしいから偏差値がとて低いんだよ。それで空に頼みがあつて.....一緒に桜ヶ丘高校受けてくれ!!!ほかに誰も受けないんだよ男子で」

桜ヶ丘高校か.....桜ヶ丘高校?原作ブレイクしちゃおっかな!.....
.....まあいいか

「べつにいいぞ」

「本当か!!!」

「ああ」

「ありがとう親友〜(泣き)」

「分かったから。泣きながら抱きつくな。それに俺はお前の?親友じゃねえ!!!」

「ひでえ。しかも強調したよ!」

そして俺は桜ヶ丘高校を受けることにした。

そのことを先生に言ったら、泣きながら「もう一度良く考えてもな
いか」と言われたので、ぱっさり断ってきた。

「先生泣いてたなあ」

「ハハハお前に口で勝てるやつはいないよ」

「何をのんびりしてるんですか、やまとくん?今夜から君はもう特訓ですよ。俺が受かってもお前が受からなかったら洒落になんねえからな」

「ひ、ひいいい」
そして大和の地獄の特訓は始まった。

合格発表当日

「よし、行くぞ」

俺は大和といちごと美穂と一緒に来ている。美穂もこの学校を受け
たらしい。

「よし！！」

大和が発表されている場所まで走って行き、美穂といちごもついて
行った。俺も歩き出す

ドン

「っ！！」

どうやら誰かとぶつかってしまったらしい。俺は足腰に自信がある
ので大丈夫だったが、ぶつかってしまった人は転んでしまった。

俺が顔向けた先には黒髪のロングヘアの女の子がいた……ど
つかで見ることがあるような？女の子はずっと俺のほうを見ている

「大丈夫？」

俺が手を出すと

「きれいな髪……」

正直びつくりした

俺は女の子を立たせる

「ひゃひゃい？あ、ありがとうございます／＼／＼」

顔を赤くしてる……そりゃ知らない男にいきなり手を握られ
て立たされたんじゃないや誰でも赤くなるだろう……多分

「いいよ、ぶつかっちゃったの俺だし。それと君の髪の毛がきれ
いだよ」

「えっ？……／＼／」

何かを考えた後思い出したかのように顔を赤くする

「空！！早く〜！！」

「じゃあ、呼ばれてるから。お互い受かるといいね」

「うん／＼／」

俺は大和たちがいる場所まで走って行った

「あつたか？」

「まだ見つからない」

「俺のは・・・あつた」

「マジか・・・空、一生のお願いだ！！俺のも見てくれ。こわくてみられない」

「私があつたわ」

「私も・・・」

「なあみんな、こいつの一生のお願いって何回目か知ってるか？」

「「2〜30回以上」」

「ひどっ！！」

「まあ見てやるか・・・」

「どうだった？」

「大和・・・残念ながら・・・あつた」

「そうかやつぱり無かった・・・ってあつたんかい！！残念でなんだよ、残念で！！」

「いやあ、そつちのほうが面白そうだし・・・な？」

「「うん」」

「くそ！！もついい」

「じゃあ、みんなで昼飯食いに行くか。俺のおごりでいいから。合格祝いだ！！」

「いいの？」

「もちろん」

「じゃあいごうぜ、あそこで死んでるやつほって置いて」

「ほって置かないで親友！！」

「親友じゃねえ！！」

「即答！・・・なんかこうも即答されるとさすがにいいと言っ
かなんと言っか」

「やっぱりほっておこう」

「まって」

そして俺たちの入学が決まった

第十話 小さい頃10 そろそろ原作突入だYO（後書き）

やっと原作突入だTAT
感想待ってます

第十一話 魔部！？（前書き）

やっとアニメ版で第一話です。

長かったTAT

第十一話 魔部!?

入学式当日

「空何組だった?」

「3組」

「っしゃー!!」

隣でガッツポーズする大和・・・まさか・・・

「お前も3組!?!」

「そっだぜ〜よろしくな空」

「最悪・・・」

「俺の扱い酷くね!?!」

そんな事言ってる大和をほって置き、教室に入る。

「空く〜ん」

「空」

聞き覚えのある声が二つ

「唯、同じクラスだったのか」

「うん、これからよろしくね〜」

「よろしく、空」

「よろしく二人とも」

「俺の時と扱い違いすぎ!!」

「っっそりゃー大和だからねえ」

俺たち三人は見事にはもった。

「酷!!!」

俺は入学式の間、長ったらしい話をがんばって聞いた。えらい!! 教頭は生徒たちの気持ちを分かっているらしくとても手短に済ませてくれた。そのあと先生の紹介、部活紹介・・・etcを終え入学

式は終わった

入学式から二週間

「いちごは4組で美穂は1組か・・・」

「そうなのか？」

「気にしろよ!!!」

「それより部活動する？」

「・・・帰宅部かな」

「俺はジャズ研はいるつもり」

「ジャズ研かぁ。音楽続けんだな」

「もちろん、フェニックスは解散したけど俺たちの絆はつながった
ままだからな」

「お前にしてはいい事言うじゃねえか！」

俺は大和の背中を思いつきりたたく

「いってえな!!!」

「おっ？やるか？」

俺は戦闘態勢に入る。戦闘態勢といつても手を下げてる自然体なの
だが・・・

「・・・やめとく。お前とやっても瞬殺されるのがオチ」

「よくわかってんじゃん」

「だってお前の中学の時の称号なんだよ。不死鳥の破壊神だぜ」

「その名で呼ぶな。俺は降りかかってくる火の子を落とすただけだ。
おもにいちごや美穂の」

「あの二人はかわいいからな」

「それ二人の前で言ったらお前殺されるな」

「思い出したくない・・・」

二人は俺が言うとはもしないで顔を赤らめるのに大和が言うとして
も怒るのだ・・・なぜだろう

俺は話を切り上げて、教室を出て廊下を歩いていった。

「漣ー！！」

「律」

この声……どっかで聞いたことが……あつ、あの時ぶつかった

「クラブ見学行こうぜー！」

「クラブ見学？」

「けいおん部だよ、けいおん部！！」

「でも文芸部に入る予定だし……」

「えっ？」

「入部希望の紙も書いたし……」

律と呼ばれた女の子が入部希望用紙を眺めた後、破った……つ

てやぶつるって酷いな

「うわあああ！！なにするんだよ律！！」

漣って言う子も怒っている？

「ほら、行くぞ！早く早く！！」

なんか無理やりだな……部活か……やってみようかな

そして数週間がたった頃

「とりあえず軽音部ってとこに入部して見ました！！」

俺は今、唯と和と大和で昼飯を食っている

「へえ〜で、どんなことするの」

「さあ？」

「……えっ？」

「でも軽い音楽って書くからきつと簡単なことしかやらないよ。口

笛とか」

「……ズドドドドーン……」

俺と大和は思いっきり音に出してずっとこけてしまった。

「ゆ、唯………」

「唯ちゃん………」

「どうしたの？二人とも」

「………」

和は分かっているらしい

「「軽音は……バンド組むんだよ。ギターとかベースとかドラムとか……俺らがやってたフェニックスみたいに」」

「ええええええ！わ、私ギターなんて出来ないよおお」

「じゃあ何なら弾けるの？」

「うっくん……カスタネット」

多分ここにいる三人は唯がカスタネットをしている姿を想像してしまったのだろう

「「……すごく似合う」「」

「いっそのこと、漣が一目ぼれしたってやつを誘って見るか？」

「りりりりり律！！ひひひひひ一目ぼれなんかしてない！！／／／／／」

「あれ？漣ちゅわん。お顔が真っ赤ですよ？」

「漣ちゃんって好きな人いるんですか？」

「い、いないぞ！」

「いいじゃんばらしても！減るもんじゃないだろ」

「ぜひ聞かせてください！！」

「わ、分かったよ。でも誰にも言うなよ」

「漣と合格発表に行ったとき。私は先に行っちゃったんだけど漣が

来るの遅いと思って戻ったらイケメンと手をつないでてびっくりしたんだよ。溲に聞いたらぶつかっちゃって起こしてもらったらしくて、それに髪の毛も褒められたらしいぜ！」

「そうなんですか。ぶつかった相手は恋だった!?!」

「む、ムギまで」

「こんにちは」

山中先生が入ってきた

「「こんにちは」」

「入部希望者がいたわよ」

「本当ですか？」

「はい、良かったわね。それと、素敵なティーセットだけど飲み終わったらちゃんと片付けてね」

「「はい」」

「うふ」

山中先生は微笑みながら部室から出て行った

「（やっぱりきれいな先生だな）」

そんなことを思う溲だった

「つしゃあ！これで廃部はなくなったぜえ!?!」

「平沢唯」

「なんか名前からしてすごそうだぞ」

「やっぱりギターだよな」

「楽しみですなえ」

「すつごおゝ強力なメンバー加入」

「（なんかあらぬ事がついた気が・・・）」

「と言うわけで空くんお願い!?!」

「なにがと言うわけだよ。」

「だって、怖い人とかいたら嫌じゃん。やめるなんて行ったら殺さ

れちゃいそう」

ブルブル

「ヘビメタかよ!!なんかDMCが浮かんできた・・・」

「DMC?」

「デトロイト・メタル・シティ」

「なんか怖そうな名前・・・」

「わかったよついてってやるよ」

「ありがと」

でも軽音部までの道のりって・・・なんだよオカ研て・・・怪しすぎる

そして音楽室まえ・・・

「早く入ろうぜ」

「だって」

トン

唯の肩に手が乗ったと思ったら

「違います違います違います・・・」

「あつ!テンポ悪くて使えなくてドジッ子・・・なにしてんの?」

「おい唯!戻ってこい!」

「ん?あつ!!それに唯・・・もしかしてあなたが平沢唯さん?」

「俺ちやう、こっちだ」

カチューシヤは唯を見る

「ど、ど、ど、も」

「ははああ」

なんか輝いてるよこの子

「いろいろと誤解しててごめん!ギターすっごく上手いんだよね!
!来てくれるの待ってたよおお!!」

(なんかあらぬおしれが・・・)

「みんな!!入部希望者がきたぞ!!しかも二人!!」

(なんか俺も入ってる・・・)

「本当か!?!」

「うわあああ」

「・・・・・・・・」

「あっ？この前の」

「まあまあ積もる話は席に座ってから！よおし、ムギ！お茶の用意だ！」

「はい」

これでいいのか？俺は今お茶を飲んでる
ズズウウウ

「う、うまい！」

「ありがとうございます」

「平沢さんの好きなギタリストって誰？」

「えっと（やっぱり言わなきゃ駄目だね、実はギター弾けないって）
じ、じじじじ」

「ジミー・ヘンドリックス？」

良く知ってるな・・・

「おおおお」

「えええじ、じじじ・・・」

「ジミー・ペンジー？」

なぜ知ってるんだ・・・

「ん？おおおおお！」

唯が目で訴えかけてくるよ。自分で何とかしろよ！

「じ・・・・・・・・」

「ジェフ・ベック!？」

すげえ、こいつ相当のオタクだな

「（ギタリストってジで始まる人多いの!?)」

「そっかジェフ・ベックか」

「どなた？」

「ロックギタリストにも二人しかいないジェフ・ベックとジェフ・

ベック以外だと言われている常に新しいサウンドを追求する挑戦的なギタリスト！」

「まあ」

「ハハハハハ」

「さすが渋いねえ平沢さん！」

「てかこいつしつてんのか？てかぜんぜん原作知識ねえ！！こんなシーンあつたっけ？」

「平沢さんみたいなのが入ってくれて良かったなあ」

「一週間以内に後二人集まらなかつたら、廃部になるところだったんだよ」

そろそろ手を貸してやるか

「お前ら唯が言いたい事ある見たいだぞ」

「（ありがとう空くん）じ、実は私軽音部を辞めさせてくださいって言いに来たんです。ギターは弾けないし、もっと違う楽器をやるんだと思って」

「じゃあなにだったら出来るの？」

「カスタ・・・ハーモニカ！！」

最後の最後で見栄はつたよ！！

「ああ、ハーモニカならあるよ〜吹いて見て」

「ごめんなさい吹けません」

見事に謝ったよ

「でもうちの部に入るうって思ったって事は音楽に興味があるってことよね」

「ほかに入りたい部とかあるの？」

「ん？ううん特には・・・」

なんか空気になってきた・・・

「春山君は？」

「俺？俺は帰宅部だけだ」

「（せつかくの力毛をここで手放すわけには行かないぜ！）」

「（廃部を免れるために・・・）」

「（何とか引き止めないと・・・）」
「一気に顔つきが怖くなった」
「本当にごめんなさい、じゃあまた」
「唯が歩き始めようとするのと律が止める」
「ああちよつとまって!!」
「もういっぱいお茶いかが？」
「でも・・・」
「クッキーとマドレーヌもあるの!」
「うん！」
「（餌付けた）」
「餌付けたよ！」

「おいし〜・・・す、すみません。こんなに「馳走になるつもりじやあ・・・」」

「いいのいいの」
「毎日一緒にお菓子を食べましょう」
「何か趣旨が違って気・・・いつつうう」
「どうしたんだらう」

「だいじょうぶか？」

「は、はひいひい／＼／＼」

「だいじょうぶか？顔が真っ赤だぞ？」

「鈍感・・・」

「鈍感ですわ・・・」

「なんのことやら」

「平沢さん！ほかにはどんなものが好き？」

「うー、おいしいものならなんでも」

「（食べ物かよ・・・）」
「うなだれる律」

「家では休みの日とかなにして過しているの？」

「「じろじろ・・・かな」」

憂ちゃんがいるからか・・・

「好きなものとかある？」

「あつ！かわいいものが好き・・・かな？」

「苦手なものは？」

「熱いのも寒いのも苦手なんだ・・・冬はコタツにこもりっぱなしだし、夏は床の上を転がってばかりいるの」

「（てごわい）」

「（いったいどうすれば・・・）」

「（わかりません）」

「あ、あのおじゃあ、」

「行かないで！！おねがい！！！！ごろごろしてるだけでいいから」

「もつとおいしいお菓子持ってきてますから！！」

なんかもう必死だな

「ごめんなさい。軽い気持ちで入部するなんて書いたから・・・期待させるだけさせてなんて謝ったらいいかああ」

泣き出しちゃったよ・・・しかたねえ

「演奏でも聞かせてくれないかな？」

「「それだ！！」」

「えっ？演奏してくれるの！？」

「うっ、食いついてきた！！」

曲名は翼をください。俺たちは座って聞くことになった

）

パチパチパチパチパチパチ

「はあ」

「どうだった？」

なにかやらかしそうだな・

「なんていうかそのすっごい言葉にしにくいんですけどあm」とても上手かったよ！音楽を楽しんでるって気持ちバンバン伝わってきた」私この部に入部します！！」

あぶねえ・・・でも入部かあ。律と漣が頬をつねりあってるよ・・・いたそう

「ばんざーい！！」

「やった・・・でその・・・」

「春山さんは・・・」

「やってくれるのか？」

「俺はもともと付き添いだからな帰るわ」

「空くんそんな事言わずに」

「そうだよ！！一緒に軽音やろうぜ！！」

「そ、その・・・入ってくれたら・・・嬉しいな／＼」

な、なんだ何かが胸にこみ上げてくる・・・いまはどうでもいいか

「い、いっしょにティータイムしましょ？」

うん。こいつらといれば楽しそうだし・・・よし決めた

「俺も入部するよ」

「くくくやった」

「じゃあ軽音部活動開始記念に」

「あつ私のカメラ」

つて漣のかよ。

「空も漣ともつとくつついて！！」

俺は漣に近づく。漣の顔が赤かった気がするが、気のせいだろう。

「いくよーん」

カシャ

その後律がデコしか写ってなく、怒っていたのはまた別の話

「あつ、でも私楽器ぜんぜん弾けないし……あつまナージャーとかどうかな？」

「運動部じゃないんだから」

「なぜか突っ込みたくなる……おれってS？」

「そうだ。この機会に平沢さんと春山さんはギターを始めて見たらどうかしら」

「空くんなら出来るかもしれないけど……私は無理だよ」

「大丈夫。俺が教えてやる」

「空ってギター出来るのか!？」

「あれ?言わなかったっけ」

「空くん中学校の時バンド組んでたんだよ」

「なんてバンド名なんだ？」

「フェニックス」

「フェニックスってかなり有名じゃないか!！」

「そうか？」

「そうだよ!!」

「この学校に後二人メンバーがいるぞ」

「ほ、本当か!？」

「あ、ああ」

「澁はフェニックスのファンだからな」

「り、律!!で、出来ればキングのサインもらってくれないか？」

「それ俺だし」

「ほ、本当か?感動的だ……」

そんな事があり俺たちは帰路について行った

次の日

「えっ!結局入部したんだ……空まで……」

「まあ流れでな……」

「どうしてもっていわれて」

「まじで!?!」

「(和……部員が足りなかったから……)」

「(ああ……)」

「マネージャーとしてとかね」

「人に言われるとなんか悔しい。ちゃんとメンバーとして入ったんだから!!空くんがギターーから教えてくれるって」

「そうなの空?」

「唯は覚えがいい割には忘れっぽいからなあ」

「がんばって」

「ありがとう」

和との絆を確かめ合ったときだった

「と言う事は新しくギターかったりするんだ」

「うーん貸してくれないのかな?」

「くれないんじゃない?」

「はっ!5000円くらいで買えるよね」

聞かないかったことにしておこう

「……」

「(こんな子つかまされて大丈夫かしら……軽音部!!)」

俺はギターをもって来ていたので放課後みんなと弾いて帰った。

第十一話 魔部！？（後書き）

どうでしたか？

感想待っています

それにしても暑いTAT

今日はけいおんだ！！録画しとなくてわ・・・でわまたノシ

第十二話 楽器 前編

こんにちは平沢唯です。こちら辺で軽音部のメンバーを紹介して行きたいと思います。

まずはベース担当の秋山澪ちゃん

背が高くて、カッコいい大人の女性って感じですよ。

「ねえねえ、何で澪ちゃんはギターじゃなくてベースをやるうとおもったの？」

「だってギターは、は恥ずかしい」

「恥ずかしい!？」

「ギターってバンドの中心って感じで先頭に立って演奏しなくちゃイケないし・・・観客の目も自然と集まるだろ?自分がその立場になるって考えただけで・・・ふう〜ボン!」

「澪ちゃん!！」

澪ちゃんは少し繊細です。

「大丈夫?」

キーボード担当の琴吹紬ちゃん通称ムギちゃん

おっとりぽわぽわ。かわいい人です。

「ムギちゃんはキーボード上手いよね。キーボード暦長いの?」

「私、四歳の頃からピアノを習っていたのコンクールで賞をもらった事もあるのよ」

「ええ、すごいね!」

(何で軽音部にいるんだろう?)

「何で軽音部にいるんだよ・・・」

空くんも思ってたみたい

「さあいただきましょう」

「そういえばずっと疑問に思ってたんだけど、この部屋ってやけに物そろってるよね。最近の高校ってこんな感じなのかな?」

「ああ、それは私の家からもって来たのよ」

「自前!??」

「はい」

「自前・・・琴吹・・・琴吹・・・!まさか琴吹社長の娘さんですか?」

「そうですね?・・・まさか春山財閥の!??」

「ええ。こんなところでお会いできるとは光栄です」

「私もです。いつも父がお世話になってます」

「社長って・・・」

「話に入れない・・・」

ムギちゃんはかなりお嬢様っぽいです

次はドラム担当の田井中律ちゃん。

元気いっぱい明るい女の子です。

「りっちゃんはドラムって感じだよね」

「そうだよな。いつもうるさいし」

「なんだと!! 私にもすごく立派な聞けばだれでも感動するような理由があるんだぞ!!」

「へえ〜どんなどんな?」

「それは!! えつと〜・・・あれだ・・・かつこいいから」

「理由になつて無いじゃん!」

「だってさあ〜ギターとかベースとかキーボードとか指でちまちまちまちまするのを想像しただけで・・・」

キイイイ!! っつてなるんだよ!!」

「(楽器選びにも性格が出るんだな)」

「そして最後に空くん」

「唯誰と喋ってるんだ?」

私の幼馴染の春山空くん

「なんでもない。それより空くんて幼稚園の時からギターうまかったよね、いつからやってるの？」

「生まれたときから」

「えっ！！生まれたときから！？」

「ああ、父さんが言うには生まれてすぐにギターに触って、数日したら弾けたらしいからな」

「す、すごいな」

「それより私はムギと空の関係の方が気になるな、なあ遷」

「なななな、何でそこで、わわわわ私に話を振るんだ！！／／／／／」

「しらないのか？空は春山財閥の次期社長だぞ」

「何でお前はここでのんきにお茶飲んでんだ！てか余計な事言うな！！」

ゴチン

「いって〜」

いたそう

「「^{てすが}誰？」」

「こいつは俺の中学校からの「親友の池上大和です。よろしく」・・・親友じゃねえ」

ゴチン

「い、いたそう。大和くん大丈夫？」

「ありがとう唯ちゃん」

「それでこっちの子は？」

「うん？・・・なんで美穂までいるんだ！！」

「大和に呼ばれた」

「や〜ま〜と〜」

「空くん目が笑ってない！！」

ゴチン

「たんごぶ三段がさね」

「漣？みお〜」

「……すごいキング、クイーン、ジャックがいる……目の前に……」

「空……このこどうしたの？」

「ああ、漣は俺たちのファンらしいんだ」

「感動的だな」

「うん」

「じゃあ演奏してくか？」

「俺はいいぜ」

「私も……」

「漣！！空たちが演奏してくれるってよ」

「……！！演奏してくれるのか？」

「なんかデジャブ」

俺たちは楽器の用意を終え、演奏に取り掛かる。

「ギター二人にキーボード一人か……律ドラム頼めないか？」

「だって私知らないし」

「翼をくださいなら叩けるだろ」

「わかった」

「二人とも律はいつも走り気味だから合わせてくれ」

「わかった」

「ムキー聞こえてるぞ！！」

「それは失礼」

「たく……行くぞ！！1、2、3、4！」

「」

パチパチパチパチ

「すごい・・・」

「これがフェニックスの演奏・・・」

「律のドラムがぴったりあって・・・合わされていた」

「私のリズムが・・・崩された・・・」

「まあこんなもんだろ」

「私・・・店の用事あるから帰る」

「太一さんが帰ってきたんだっただな」

「うん」

「おかわりはいかが？」

「うん、ありがとう」

「そういえばムギちゃんは合唱部に入りたかったんでしょ？」

「ええ、でもめったに出会えないとっても楽しくて愉快な人たちの仲間になりたかったの」

「（珍獣って事ですか）」

「そういえば平沢さん。もうギターは買ったの？」

「唯でいいよ。私もすでに漣ちゃんの事、漣ちゃんって呼んでるし」

「だよな、なんで俺は名前なのに唯は名前じゃないんだろって思ってたんだよな」

「それは／＼／＼ゆ、唯／＼／＼」

「ぐほほ（か、かわいい）」

ふ、不覚にもドキドキしてしまった

「で、唯ギターは？」

「ん？ギター？・・・そっか忘れてた！！私ギターやるんだっけ」

「軽音部は喫茶店じゃないぞ」

「へへへへ。ギターってどれ位するの値段」

「うーん、安いのは一万円台からあるけど・・・あんまり安すぎるのも良くないからな」

「五万円くらいのがいいんじゃないか？」

俺はお茶をすすりながら言う。今日もムギの入れるお茶は上手い

「ご、五万円！！私のお小遣い10か月分・・・」

「高いのは十万円するのもあるぞ」

「ちなみに俺のは50万だぞ」

「50万！！・・・部費で落ちませんか？」

「おちません」

「これおいしいわよ」

お菓子で・・・

「ハムハム、うーん。おいひい」

みんなも笑顔になる・・・こいつってムードメーカー？

「とにかく、楽器が無いと何も始まらないしな。」

「よし、今度の休みにギター見に行こうぜ」

「おー！！！」

一週間後・・・

「ここだったよな」

俺は唯の家の前にいる

ピンポンピンポン

「はい・・・空さん！！お久しぶりです」

「憂ちゃんおつきくなつたな。唯起きてる？」

「それが・・・まだ・・・」

「だろうな・・・」

「空じゃねえか」

「大和！どうしたんだ？」

「大和さんこんにちわ」

「おう憂ちゃん」

「それで？どうしたんだ？」

「ちよつと10GIAに行こうと思ってね」

「俺たちも行くつもりだから一緒に行かないか？」

「いいぜ」

「それよりまずは・・・唯起こしてくるな」

「が、がんばれ」

「唯起きろ！！」

「後5分」

「オキナサイ」

俺は殺気駄々漏れで言う

「すいませんでした！！」

唯は即刻起きて土下座した

「行くぞ」

「はい！！」

「大和は弦の張替えか？」

「ああ、後は新しいピック買いにな」

「ピックってなに？」

「ああ、ピックって言うのはギターの弦をはじくやつだよ」

p.i.p.i.p.i.p.i.p.i.p.i

「律からだ。なんだろう？」

『おい出るのが遅い!!』

「で、なんだよ？まだ集合時間には早いだよ」

『そうだった!! 澪が誘拐された!!』

『どうやら私と間違えられたらしくて』

「ムギもいるのか？場所は？」

『10GIAの前だ』

「分かった今行く」

p.i

「空」

「唯少し走るぞ・・・てか背中に乗れ」

「えっ？うんわかった」

「行くぞ大和!!」

「おう!!」

第十二話 楽器 前編（後書き）

ギター本体だけで50万円はありえないですね。そういう設定と
思ってください。

漣があああー！さらわれたー！どっしよっー！

感想待ってます

第十三話 楽器 中編

「はあはあ・・・律!!!」

「空!!!」

「漣は!?!」

律は首を横に振る。見つかってないようだ。

「手分けして探すぞ!!! 見つけたやつは直ちに俺に連絡。その後は俺と大和で行く」

「...わかった」

俺はみんなが走って行った後に、路地裏に行く。

「アカシックレコード発動!!!」

アカシックレコード・・・それは宇宙意思。宇宙のネットワーク

「見つけた」

場所は元暴力団の溜まり場。今は取り壊し予定の廃家。

「転移座標x345y312。転移!!!」

俺は廃家の前に転移した。

僕の名前は御門健太。今町をあるいていたら女の子が車で誘拐されるのを見た。男として、ほおって置けない!!! 俺は車に発信機をつけ、追いかける。ついたのは廃家だった。しかしそこには先客がいた。

「だれだ!!!」

後ろには一人の男がいた

「お前、ここがどこだか知ってきてんのか？」

うざいので無視。俺が入ろうとすると腕をつかまれる。アカシックレコード発動！……こいつ……転生者！！まあいいか

俺は真空波で男を吹き飛ばす

「ふべらー！」

弱wwこれでも転生者かよ

「俺は行く。お前はここで待っている。後で話がある」

「ちっ！！」

男はもう動くことすら出来ないようだ

何で私がこんな事に！！私はただ律たちと歩いていただけなのに！！

「なあこいつ琴吹社長の娘じゃないぜ」

「そうみたいだな。じゃあどうする？」

「ふん好きにしろ」

「好きにしろとはリーダーも人が悪いですね」

「そのまま返したら誘拐した意味が無いだろう」

私なにされるのかな……

「この女結構かわいいじゃねえか」

「変態おじさんに売り飛ばせば、結構な金になるな」

「でもまずは……俺らが楽しんでからだ」

男が私の体に触れようとしたとき

ドン

扉が開いて私が一目惚れした彼が来た

ドン

「まってるいまほどこいてやる。でも俺が言いと言つまでは目隠しと
るなよ」

「わかった」

俺は縄を解く。そして澗をお姫様抱っこする

「なななななななにしてるんだ空!!!」

「顔赤くして言うなよ」

「.....」

外にいる男と合流して念話で話す

（まったか？）

（いやまってるよ）

（単刀直入に聞く。お前は転生者だな、なぜ原作に介入しない？）

（本当に単刀直入だな。答えよう俺は原作知識が無いのだ）

（なに!?!）

（神が世界間違えたらしくてよ）

（そうか俺は春山空）

（僕は御門健太。僕はこの辺で失礼するよ）

（まて、携帯のアドレスを教えろ）

（わかった）

「空、だれかそこにいるのか？」

「ああ、友達だ。気にするな」

（気配消せよ）

（ごめん。じゃあこれで）

（ああ）

健太は風のように消えていった

「もう目隠しとっていいぞ」

「わかった.....わあああ」

「どうした」

「顔近い!!!」

「すまん」

「だ、だいじょうぶだ」

「ちょっとまってる」
「わかった」

p i p i p i p i p i

「もしもし律か？」

『ああ、それで漣は!?!』

「無事救出したよ」

『よかった』

本当に友達思いなやつだな

「今日はもうおそいから楽器を見に行くのは明日にしないか？」

『わかった』

「じゃ」

『うん』

p i

「漣、ちょっと付き合え。」

「いいけど、どこ行くんだ？」

「いいから」

「空、カラオケBOXに連れ出してどうしたんだ？」

「漣、こっちにこい」

俺は真剣だった。また同じような事があつたらどうしようかと思つ
んだ。俺は漣を優しく抱きしめる

「空!?! / / / / /」

「ごめんな、もっと早く行ってやれなくて。怖かっただろ。ここに
は俺しかいない。泣いたっていいんだぞ」

俺がそういうと漣は俺の腕の中で泣きだした

「……うわーん。怖かったよ空!?! うわーん」

数分泣いた後、澁は安心したのか寝てしまった。
俺は澁を家に送り届けた後家に帰って寝た

もう一人の転生者か・・・面白くなってきた

第十三話 楽器 中編（後書き）

感想ください。

もう一人の転生者出ました！！

感想待ってます

第十四話 楽器 後編（前書き）

更新遅れてすみません。

第十四話 楽器 後編

次の日俺は、昨日のような事が無いようにみんなの家を訪問していた。

ピンポーン

「はい」

「憂ちゃんおはよう」

「空さん。おはようございます。お姉ちゃん呼んできますね」
「たのむよ」

「空くんおはよう」

「おお、唯。今日は寝て無かったんだな」

「うん」

「じゃあ次はムギの家行くぞ」

「わかった」

ピンポーン

「はい、どちらさまでしょうか」

「ムギの友達の春山ですけど。ムギいますか？」

「春山様ですね。少々お待ちください」

「空くん、唯ちゃんおはよう」

「おはよう、ムギ(ちゃん)」

「じゃあ次は律の家か」

「行きましよう」

「うん」

ピンポーン

「田井中です。どちらさまでしょうか？」

「律の友達の空です。律いますか」

「姉ちゃん？待っていてください」

「姉ちゃん、空って言うイケメンの友達が外で待ってるよ。姉ちゃんも隅に置けないね」

「なっ、聡！！」

「仲のいい姉弟だこと」

「仲がいいなら私たちも」

「唯の家はシスコン気味だけどな」

「シスコンてなに？」

「ばかだ・・・」

「おまたー」

「遅いぞ律」

「だってレディーの用意は時間がかかるんですよ」

「そのほとんどが弟とじゃれあってることか？」

「うっ・・・聞こえてたのか」

「まるぎこえ」

「仲がいいのね」

「私の家ほどじゃないけどね」

「仲良くない！！」

「次は漣のうちか・・・大丈夫かな？」

ピンポーン

「はい・・・あなたは昨日漣を送って来てくれた・・・昨日はありがとうございます」

「いえ、それより漣はいますか？」
「ええ、呼んでくるわ」

「みんなおはよう」

「……おはよう」「……」

「じゃあいこうか」

「漣……大丈夫なのか？」

「そうだよ昨日あんな事があつたのに」

「……わたしは大丈夫さ。空が守ってくれたから
そっか……よかった」

「おお、漣ちゆわんは空にもつとお熱になつちやつたのかな？」

「り、律！！そそそそそんなわけないだろ／／／／／／／／」

「顔が真っ赤ですよ」

「う、うるさい！！」

「????俺にお熱?どういうことだ？」

「……漣ちやんがんばれ」「……」

「ありがとう……みんな」

「????いくか」

「……おー!!」「……」

「そういえば唯ちゃん、お金は大丈夫だった？」

「お母さんに無理言つて、五万円前借りさせてもらった。これから
は計画的に使わなきゃ」

唯にしてはいい心がけだ!!

「いけないんだけど……今なら買える」

やっぱり唯か……

「ほらほら」

「ちよっと見るだけ」

唯はそういつて服屋へ入ってしまった

「はあ」

「ちよつとだけならいいんじゃないかしら」

「ムギ・・・まあいいか」

「な、なあ空似合うか？／＼／＼」

澪が律に進められたであろう服を来てこっちに来たときにはびっくりした。とてもかわいいのだ

「澪・・・とても似合ってるぞ！」

「本当か!？」

「ああ」

俺がそういうと澪は律たちがいるほうへ鼻歌を歌いながら行ってしまった。澪が行った後俺は心臓の高鳴りに気づいた。

「（こんな気持ち初めてだ・・・まさか俺は澪の事を・・・まさかな）」

そのあとモデパートへ行ったりゲーセンに行ったりした。

「あー、また取れなかった」

「どれだ？」

「あのウサギのぬいぐるみ」

俺はお金をいれてUFOキャッチャーを起動させる。元一人暮らしオタク大学生の力見せてやる・・・恥ずかしい・・・

「ほら、とれたぞ」

「空くんすごい。ありがとう」

「空、こっちのも取ってくれないか？」

俺は澪を見た瞬間また胸の高鳴りを感じた。やっぱりこれは・・・
「ほら、取れたぞ」

「ありがとう。空の意外な特技発見だな」

「それはよかった」

その後も俺はUFOキャッチャーで遊んでた

「あーつかれたー」

「へへ、買っちったー。それに空にもぬいぐるみとってもらったしな」

「楽しかったですねー」

「次はどこ行こうか？・・・あれ？何か忘れてない？」

「楽器だ、楽器」

「おお、見事なコンビネーション」

そして10GIAについて

「すごい。ギターがいつぱーい」

「そりゃ楽器屋だからな」

「ふうーん・・・？」

どうやら唯がGibson EDS-1275をみて不思議に思っているらしい。Gibson EDS-1275とは、二つのギターがくつついたような形をしている奇妙なギターだ。もっともこれは一人用だが

「唯、お前の事だからどうせ宇宙人かなんかが使うものと勘違いしてるんじゃないか？」

「うっ！・・・否めない・・・」

「これはGibson EDS-1275とって結構有名なダブ

ルネックギターの定番モデルだ。もちろん一人用だぞ」

「そうなんだ」

俺が唯と話してると律が

「唯！どれがいいか決めた？」

俺たちは律の元へあるいて行く

「うん、なんか選ぶ基準とかあるのかな？」

「もちろんあるよ。ギターって音色はもちろん重さやネックの形や太さもいろいろあるんだ。」

唯はもうすでに聞いていないようだ。・・・てか自分で聞いていてそれかよ

「だから女の子はネックが細いほうが・・・」あっ！このギターかわいい「・・・」

（）（）（聞いちゃいねえー！！）（）（）

ここで俺ら四人の心は一つになったであろう。

「漣・・・」

「空・・・何も言わないでくれ」

泣きながら言われてもな・・・

ちなみに唯が見ているのは Gibson Les Paul。後にギ
ー太になるやつだ。・・・俺変なとこばっか覚えてるな。原作知
識ほとんど忘れたのに・・・

「ふふん」

「そのギター25万円もするぞ？」

「えっ？・・・あっ！！本当だ！！」

嘘言っでどうする！！と突っ込みたかったがやめといた

「これはさすがに手が出ないや」

「このギターがほしいの？」

「うん」

涙目になるなよ・・・何とかしたくなってきた

「あっちに安いのあるぜ」

「う、うん・・・やっぱこれがいいな・・・」

やっぱりな……

「そういえば、私も今のベースがほしくて悩んで悩んで……」

「こ、これください!! / / /」

なんか顔を赤くしてる溼が想像できる……

「私も中古のドラムセット値切って値切って……」

「もう一声!! もう一声!!」

こっちも想像で来てしまう……

「店員さん泣いてたぞ」

店員が泣くって……どんだけ値切ったんだ?

「どうしてもあのドラムがほしかったんだよ!!」

「あの値切るって?」

「ん? 欲しい物を手に入れるために努力と根性でまけさせることだよ」

「すごいですね! なんか憧れます!」

「(憧れる要素がどこに!?)」

「ん……唯……」

「あ!! よ〜 ムギちょっとついてきてくれ」バイト……どうしたんだ?

俺は律が言葉を言い終わる前に、ムギを誘う

「ちよつとね」

「?……!! わかりました」

俺たちは店員さんのところまであるいて行く

「すみません。あのギター安くしてもらえませんか?」

「はあ〜? ……あ、ああ!! あなたは所長の娘さんに春山財閥の次期社長さん!!」

すごい驚きようだな。

シユタシユタ

電卓出す速さも早!!

カタカタカタ

「でわ、こんなもんで・・・」

10万・・・もう一声だな。なんかムギがとっても笑顔になったな・・・なんでだろう？

「もう一声!!」

そういうことか・・・ドンだけ憧れてたんだよ!

カタカタカタカタ

「こ、こんなもんで・・・」

提示された金額は五万円・・・これでいいか

「も、ありがとうございます。これでいいです」・・・
まだまけさせる気だったのかよ・・・

「みんな、そのギター五万で売ってくれるそうだなぞ」

「まじで!?!」

「なにやったの!?!」

「この店実は家の系列のお店で」

「「「えっ!!」「」」

「それで俺の会社がムギの会社とかをまとめている財閥なんだ」

「ムギちゃん空くんありがとうございます!!残りはちゃんと返すから」

「よかったよかった」

「はい」

唯はギターを購入しみんなと帰って行った

唯がギターでチャルメラを弾きみんながずっとこけたのは余談だ

第十四話 楽器 後編（後書き）

今日で休みが終わる・・・TAT
感想待ってます

第十五話 特訓（前書き）

更新遅れてすいません。
やっと一期第三話です

第十五話 特訓

とある放課後・・・

「ギターの弦で怖いよね。細くて硬いから指切っちゃいそう」

「そうだけ、気をつけないと指がスパツと切れて血がドバツと
！！」

「きゃあああああああ！！」

えっ？・・・今の光景？見てのとおり・・・見てないか。今は唯
と律が話していて、その話に過剰に反応した漣が俺に抱きついてい
ると言う・・・なんと漣ファンに妬まれそんな光景です。

・・・マシユマロ!?

「漣ちゃんが悲鳴を・・・？」

「い、痛い話は駄目なんだ！！」

顔近いつて！！しかも俺の心拍数が半端無い・・・このカオスな光
景を誰か止めてくれ」

「大丈夫だよ、本当に血が出てるわけじゃないから」

ほら、と言って唯は自分の指を見せる

「そうだぞ漣。それに練習すれば自然と指も硬くなるから切れる心
配は無いぞ・・・それよりいい加減離れてくれないか？」

「・・・（ウルウル）」

涙目でこっちを見られてもなあ？・・・それに漣ってこんなキャラ
じゃないし

「お熱いね〜お二人さん」

「り、律！！ノノノ」

nice律。やっと離れてくれたよ

「はあ〜」

「ギターの練習って言われても、何から練習すればいいか分からな

いよ

「うーん、まずはコードの練習だな。俺も覚えるのに苦労したぜ」

「そうだよな、あん時の大和は……って何でここに大和がいんだよ……」

「細かいことは気にするなみんなは気づいてただろう？」

「……」

「残念」

「うう」

涙目！？

「きも！」

「酷っ！」

「はあ〜それより大和が言ってたように、まずはコードからだ。タブ譜と言つのもあるけれど、それは止めておいたほうがいい、後々苦労することになるから。大和がコードを覚えることが出来たんだ、唯に出来ないことは無い！」

「ほら、これつかえ」

澪が唯にサルでも分かるコード本を渡した。

「ありがとう、澪ちゃん空くん！！そうだよね大和君に出来たんだから私に出来ないことは無いよね」

プチ

あつ……やべ地雷踏んだな……

「てめえ、ギターをなめてんじゃねえ！！本物ってえのはこういうんだ……」

あゝあ、完璧にスイッチ入ったよ

みんな怯えてるし

じゃがじゃががじゃじゃ

「この音楽は……澪、耳ふさいどけ！」

しかし澪が耳をふさぐ前に、歌が始まってしまった

「Kill Kill I, am Kill you

殺す 殺す お前を殺す

近くでも同じ音が・・・

「って美穂なんているんだよ！」

「空が私に助けを求めているから飛んできた」

「俺はまだ何も・・・」

「そう？話は聞いていたけど、唯に楽譜の読み方を教えられるの？」

「うん」

「わかった」

「ありがとう」

「それよりもうすぐだね、中間」

「中間？なにそれおいしいの？」

「駄目だこりゃ」

試験日当日・・・

「ふう〜やつとテストから開放された」

「高校になってから、急に難しくなったから大変だったわ」

「そうだな」

「でももつと大変そうなのが若干2名」

唯の口から今にも魂が抜けそうさ。これはいかに

「そんなにテストの点数悪かったのか？」

「フフフ、クラスで二人の追試だそうです」

唯は12点、大和は・・・白紙

「だ、大丈夫よ。今回は勉強の仕方が悪かっただけじゃない？」

こいつらの場合は・・・

「そうそう、ちょっとがんばれば追試なんて余裕余裕」

・・・慰めないほうがいい気が・・・

「勉強はまったくしてなかったけど・・・」

「右に同じ」

「励ましの言葉返せコノヤロウ!!」

やっぱりな・・・だいたいこいつらが勉強するなんて考えられん

「何で勉強しなかったのさ」

「いや〜しようと思ったんだけど、なんか試験勉強中ってさ勉強以外のことに集中できたりしない？」

開き直った!?

「あ〜それはあるな、部屋の掃除はかどつたりなあ」

「お前は試験期間中部屋の掃除してたのか？」

「し、してないぞ」

そういつてそっぽを向く律・・・してたんだな

「勉強の息抜きにギターの練習してたら抜け出せなくなっちゃって、結局ぜんぜん勉強出来なかったの。でもねおかげでコードいっぱい弾けるようになったよ!!」

ピースサインされても困るんですけど

「その集中力を少しでも勉強に回せば・・・」

「そういつりっちゃんはとうだったのさあ」

「あ?私?余裕ですよこのとおり!!」

なんだと・・・89点・・・世界が滅亡する

「「「こんなりっちゃん(律)のきゃらじゃないよ」「」」

そっういえば大和復活したんだ・・・

「おっほっほー、私ぐらいの人間になると何でもそつなくこなしちやうのよ」

「「りっちゃんは私(俺)の仲間だと信じてたのに」「」

「おっほっほっほー」

「でもテストの前日に泣きついてきたのはどこの誰だっけ?」
やっぱりか

「わった、ばらすなよ!!」

「それより仕事って何だ？」

「空は会社の次期社長だから、仕事してるんだよ」

「でも、授業でなくて仕事っていいのか？」

「俺実は西港高校に推薦もらっててそこ行く予定だったんだけど、大和に誘われてここ受けたんだ。それで前校長に授業少しは出てくれないか？って言われたから西港高校に今からでも来ないかって言われたんですけどって言ったら土下座してサボっててもいいからいってくださいって言われたよ」

「西港高校・・・超名門校」

「校長のお墨付き・・・」

「空に口で勝てるやつがいたら見て見たいぜ。こいつ授業出て無い割には成績いいいな」

「そうなんだ・・・」

数日後・・・

「あつ、今日は羊羹」

唯勉強しなくていいのか？

「追試の人は合格点取るまで部活動停止だって」

「ふくん・・・はあ!？」

「結構厳しいな」

「そしたらここにいてもまずいんじゃない」

「大丈夫だよ、お菓子食べに来てるだけだし」

「そっかそれなら安心だてなんだ!!」

「もしも唯が部活出来なくなったら、私たち四人だけになっちゃうんだよ」

「もしかして廃部かもな」

「ああああああ!!」

律うるさい

「追試はいつあるの？」

「一週間後だよ」

「一週間後か」

漣・・・落ち込みすぎだ。いざと言つときは美穂を連れ込むから大丈夫だ

「そんだけあれば、毎日ここに来て大丈夫だよね」
ズバーン

みんなが盛大にずっこける

「それだけしかないの！」

「追試に受からないとこのクラブ自体がなくなるかもしれないんだよ」

「そつだよね、みんなと部活続けたいから私がんばる！」

追試まで後6日

「なんか唯がないと張合いが無いな」

「その割にはよく食べてる」

もつともな返答だ

「えっへへ、それとこれとは話が違いますわん」

「唯・・・ちゃんと勉強してるかな？」

「多分して無いだろうね。もし廃部になりそうだったら、美穂を誘うから大丈夫だ」

「はあ」

漣、ため息ばかりついていると幸せ逃げぞ？

追試まで後3日

「唯・・・勉強進んでるはずだよね」

「うん、進んでるかな？」

「いざと言つときは美穂を！」

「そのネタ飽きた」
「ネタじゃないんだけどな」
「・・・やっぱ心配になって来た」
「今晚、みんなで励ましのメールしてあげるのはどう？」
「おお、名案だな」
「うん、私もやって見るよ」
「俺も時間を見つけてやって見るよ」

そして夜

勉強がんばれよ
分からないところがあつたら俺らに頼れ
じゃあな
「送信つと」
はあ〜大丈夫かな？

追試前日

「というわけで空くん助けて」
「なにがというわけなんだよ!？」
なんかデジャヴ
唯の説明

数分後

「勉強してきたんじゃないのか？」
涙目になってるよ
「凄、泣くな落ち着け・・・そうだ今夜勉強会でも開いたらどうだ？」

「溇に頼めば絶対合格点取れるぞ！上手いんだぜ！夜漬け術教えるの」

「うおおおい、普通に教えるよ！」

「今日はお父さんが出張でね、お母さんが付き添いでいないから気兼ねしなくていいよ」

「憂ちゃんがいるだろうが」

「憂は別に大丈夫だよ」

「……唯ちひの妹か」

少しの間考え、不安そうな顔をする三人

「心配しなくても大丈夫だぞ、憂ちゃんは唯とは正反対だから」

「空が言うなら信じられるな」

「さすが溇、こんなときでもアプローチを欠かさない」

「尊敬します」

「り、律ー！！ムギまで／＼／＼」

「さあさあ、あがつてあがつて」

「……おじやましまーす」

「あ、お姉ちゃんお帰り。お友達？あつ！空さん！こんにちは」

「おう、憂ちゃん」

「意外なところに敵がいたな溇」

「り、律ー！！／＼」

「はじめまして、妹の憂です。姉がお世話になってます」

そついつとお辞儀をする憂ちゃん……律儀な子は嫌いじゃないよ
今度はスリッパを並び始める。さすがというべきか、なんとというべきか

「スリッパをどうぞ」

「……（出来た子だー）……」

なんか三人の心の声が聞こえたようなきが・・・

「いやー姉妹でこつも違つとはなあ」

「なにが？」

「妹さんに唯のいいところ全部吸い取られたんじゃないの？」

「ひつどーい」

コンコン

「あのーみなさん良かったらお茶どうぞ。買い起きのお菓子デ申し訳ないんですけど」

「……」（本当に出来た子だー）「……」

今度は完璧に聞こえた。しかも共鳴した

憂ちゃんはお茶の用意を始める

「憂ちゃんは今年生？」

「中三です」

「おつほー、一つ違いじゃん」

「受験生ですね」

「はい」

「どこ受けるか決めてる？」

「うーん、出来れば桜ヶ丘高校へ行きたいんですけど私の学力で受かるかどうか・・・」

「お姉ちゃんでもうかったから大丈夫だよ」

「そうだぞ、それに大和もうかったんだ。憂ちゃんが落ちるはずが無い」

「おいでおいで」

ピースしている唯・・・今けなされてんだぞ？

「お姉ちゃんに勉強教えてもらえばいいんじゃない？」

「ん、うんうん」

コクコクと首を動かす唯

「えっ！？それは・・・自分で出来るから・・・」

「ふふふ、あっはっは断られたぞ」

「え、何で何で？」

「で、でもおねえちゃんはやるときにはやる人です」

フォローもすっかりしてるね

「分からないところがあつたら俺が教えて上げるからいつでも言っ
てきてくれていいよ」

「お願いします」

「唯、お前は駄目で空は良かった見たいだぞ」

「だって憂は空くんのが「わーわーお、お姉ちゃん！！／＼／＼」

・・・ゴメンゴメン」

「？それより勉強始めようぜ？」

「そうだな」

「じゃあ、あまり時間無いから集中して行くぞ」

「うん」

基本的に漣が教えて、俺とムギはその手伝い。当然のように律が暇
になる

「教科書の10ページ。じゃあこの式」

「うん」

ちやくちやくと勉強を進めて行く唯だが・・・

「ああ、足がしびれた」

その言葉に過剰に反応した律が・・・

チヨイ

「ぎゃひひひひひ！！」

「りっ！！」

律は漣の鉄拳をくらい、俺がどこからか出した真剣を首に突きつけ

らり部屋を出て行った・・・否、追い出されたというほうが正しいかもしれない。もちろん剣をどこから出したかは企業秘密なので言えないが

「はあ、ダメだー集中力が続かない」

「おいおい、まだはじめてから三十分しか立ってないぞ」

「ムギ、例のものを」

「うん。唯ちゃんケーキ持ってきたから後で食べよう。だからもう少しがんばろう？」

すると唯はいきなり元気になり、問題を見る見るうちに解いて行った。

「おーみんなやつとるかね？」

律が出てきたが無視

「イツエーイ私だよん」

いらいらしてきた

「うおおおおはああああたのもお！！」
うぜえ

「やかましい」

漣が鉄拳をいれ俺が蹴りを入れる。十二分に手加減した蹴りを

「おいしい」

「このためだけに生きてるって感じ」

「この子たちの人生っていったい・・・」

ピンポン

「唯誰か来たぞ」

「だれだろう？」

ガチャ

「あつ和ちゃん」

「どう、勉強はかどってる？」

「うんおかげさまで」

「あつ、和じゃん。どうした？」

「差し入れもつて来たのよ。そちらが軽音学部の？」

「うん、紹介するね。こちらが秋山澪ちゃん。で、田井中律ちゃんに
琴吹紬ちゃん」

「「「よろしく」」」

「真鍋和です。唯と空とは幼馴染なんだけど高校でも同じクラスになりました。」

「幼稚園からほとんど一緒なんだよ」

「俺も外国行ってる間以外はずっと同じクラスなんだよな」

「ほんと不思議な縁よね。それよりサンドイッチ作ってきたんだけど食べる？」

「おお、ちようどお腹すいてたところ」

「今ケーキ食べてたじゃん」

「ぜんぜんOKだしてだして。ごつつあんです」

その後他愛の無い話をしていると和が

「ところで勉強大丈夫なの？」

「できた」

やっとか・・・途中唯が寝てしまい起きたと思ったら泣き出す事件があったのは余談であった

「これだけ解けたら大丈夫だろ」

「これで追試もばっちりね」

「ありがとう、澪ちゃん、ムギちゃん、空くん」

「それじゃあ私たちはそろそろ」

「あれ、律は？」

「律なら憂ちゃん拉致って下でゲームやってるよ」

「うはぁ・・・また負けた」

「(馴染みすぎ・・・てかまたって!?)」

そして追試当日

俺と律はいつもどおりにしてるが周りがカオスな状態になっている
澪が部室を歩き回って、ムギがお茶をこぼしている・・・カオスだ

「ムギ、お茶」

「はっ! すいません」

「澪も落ち着けて、あれだけががんばったんだから大丈夫だろ」

テスト返却日・・・

「今日返却だよな、合格点取れてるかな唯?」

「あれだけ勉強したから大丈夫のはず」

ガチャ

「・・・あっ」「・・・」

そこには真っ白になった唯が・・・真っ白?

「どうだった?」

「まさか不合格とか・・・」

「どうしよう澪ちゃん・・・」

「まただめだったのか・・・?」

唯はテスト用紙を見せる

「100点取っちゃった」

「極端な子!!」

本当に極端だ

その後テスト用紙を持った唯を写真にとったりといるいろいろなことが
あった。

これで、部活が再開できる・・・と思ったのだが。勉強のしすぎで

唯がコードを忘れてしまっていた。
どないしょ

第十五話 特訓（後書き）

感想待ってます

また更新が不定期になるかもしれませんが堪忍なう（作者はけして
関西人では無いです）

第十六話 合宿！！

ギユイイイイン

「ゆ、ゆびがああ」

「本当に忘れたんだな」

「またいちからやり直しか」

「おばあちゃんに良くほめられたんだ。唯は一つの事覚えるとほかの事全部忘れちゃうんだねって」

「いや、絶対それ褒められてないから」

ガチャ

漣が勢い良く部屋に入ってきた・・・そんなにあわててどうしたんだ？

「あつ、漣ちゃん」

「どこいったんだ？」

「合宿をします！！」

「どうしたんだいきなり？」

「合宿？」

「そう、もうすぐ夏休みだし」

「もしかして海？それとも山とか？」

「遊びに行くんじゃないやありません。バンドの強化合宿。朝から夜までみっちり練習するの！！」

「変に敬語使わなくていいから。それにあいつら聞いてないよ」

俺の隣では「着ていく服買わなくちゃ」「水着も買わないとな」

「きけええええええええ！！」

「夏休みが終わったらもうすぐ学園祭でしょお！」

「学園祭・・・」

「そう、桜高軽音部のライブって言えば昔っから結構有名だったんだぞ」

「まあ昔の・・・特にD A E T H D I V E Lの時代は結構有名だったろうな」

「しっているのか？」

「まあな、それよりも・・・」

「高校の学園祭ってすごいんですよ」

「模擬店」

「やきそば」

「たこ焼き」

「はいはい、私メイド喫茶がやりたい!」

「え、お化け屋敷がいいよ」

「メイド喫茶!」

「お化け屋敷!」

「メイド喫茶!」

「お化け屋敷!」

「・・・澁の怒りのボルテージが・・・」

ゴチン

うわついたそwww

「何で私だけ・・・」

「私たちは軽音部でしょ、ライブやるの!」

ガチャリ

「ごめんなさい、遅れちゃって・・・マドレーヌ食べる?」

「素敵なタイミングだムギ!」

「まあ」

「ムギはどう思う?」

「いくらあわてずやって行くって言ったってもう三ヶ月にもなるのに一度も合わせた事ないんだぞ」

「それには俺も同感だな」

「まあまあまあまあまあ」

「六回・・・」

数えてたんだ・・・

「うわゝ行きましよう是非。みんなとお泊りいくの夢だったの」

「そうなんだ」

「じゃあさ海にする？山にする？」

バン

「だから、バンドの強化合宿って言ってるだろう」

「でも、費用とかどうするんだ？」

「そうだぞ、きつくないか？」

「そ、それは・・・空、別荘とかない？」

「ない事はないけど・・・外国にあるのがほとんどだしな・・・」

「じゃあムギは？」

「ありますよ」

「・・・あるんかい」「」

「じゃあ、四人とも楽しんでこいよ」

「えっ？四人？空くんは？」

「いや俺、男だし・・・」

「空も・・・行くよね」

うっ・・・漣の上目遣いは反則だぞ！！

「はあくわかったよ。いくよ」

「おはよ」

「おはよう」

「おーっす」

「おはようございます」

「後は唯だけだな・・・」

「おそいな唯」

「多分寝てるかと思われませんが・・・漣さんどういたしましょうっ？」

「何で敬語なんだよ・・・電話して見る」

Piriririri

『もしもし』

「おはよう」

『おはようございます』

「・・・やっぱり寝てたのか・・・」

「すぐに来るって」

「そっか」

「ごめんなさい!!」

「ふう、何とか間に合った」

「あれだけ寝坊しないように言ったのに」

「ごめん、ワクワクして上手く眠れなくて」

「ったく、小学生か」

「へへと笑う唯」

「いや、そうでもない見たい」

「・・・ムギも寝てたのか」

「ムギちゃん・・・夢だつていったもんな」

「ふふふ、ふふふジェル状がいいの」

「げる!？」

「何の夢だろうな？」

「よし、写真に収めておこうぜ」

「よしなよ、可愛そうだよ」

そういつている唯も満更ではなさそうだ

「思い出思い出」

『ピ・・・カシヤ』

「つつんん・・・ごめんなさい」

「ほら、起きちゃった」

「悪い悪い。ソレよりもそろそろ教えてくれよ。別荘ってどこにあ
るんだ？」

「あつえつと・・・」

周りが暗くなつた。トンネルに入ったようだ

「もうすぐ(^ | ^)」

え、絵文字だと・・・こんなシーンあつたっけ？てか絵文字ってシーン以前にキャラ変つてない？

「わー!!」

「すっげー!!」

「海かぁ」

「はい、海」

「唯!!」

「わぁ」

「ふっ!せーの!!」

ガラ

気持ちいい。それに潮の香りがする

「塩のおいだ!!」

「泳ぐぞ!!」

「おえっ、だから遊びに来たんじゃなくて・・・」

「少しくらいはいいんじゃないか？」

「でも」

「濡だつて遊びたいんじゃないか？」

「う、うん」

ムギの別荘前・・・

「でっけ」

「ふわぁ」

「本当はもつと広いところに泊まりたかつたんだけど・・・一番小さいところしか借りれなかったの」

「そうだな、でも5人入るくらいなら大丈夫だろ」

「一番小さい・・・これで？」

ガチャリ

「おお〜」

「うわ〜広い！」

「すっげ〜な」

「ん？これは・・・」

「あっ！ごめんなさい。何もしておかなくていいって言って置いたんだけど・・・」

「いいんじゃないか？これくらいの気遣い」

「いつもなるべく普通にしたいって言うてるのに中々分かってくれなくて・・・」

ガチャ

「どうぞ」

「はあ〜はは！！！」

「しばらく使ってないから動くかどうか心配だけど」

・・・家の方が数は多いな

「うん、大丈夫そう」

なんか、あついなここ

「なあ、唯と律は？」

「えっ？さっき探検だーとか言ってどっか行ったけど」

「しょうがないな〜」

ガシヤ

そういつて鞆からラジカセを取り出す漣・・・ラジカセ？

「なに？」

「ああ、これ？」

カチャ

流れ出したのは・・・Maddy Candy？なんでここに

「昔の軽音部での学園祭のライブ。この前部室で見つけたんだ」

あくなるほど

「上手」

「私たちより相当上手い」

「うん」

「聞いてたら負けたくないなって」

「それで合宿って言い出したのか」

「うん」

「でも・・・負けないと思う」

「えっ？」

「そうだぞ、それに焦りすぎだ」

俺はそういつてギターを取り出しMaddy Candyを弾く

「それ・・・」

「俺なDEATH DEVILに知り合いがいるんだ」

「デスデビル？」

「その歌、歌っている人たちの事」

「よーし！！遊ぶぞ！！」

「Oh Yeah!!」

「ってはや、練習は？」

「先行ってるから三人とも急いでねえ」

「これでも？」

「う、うん。少し心配になって来た」

「おい、早くー」

「ちよつとまって！！澪ちゃんソラ君、私たちも行きましょう」

「えっ？ムギ行くつもり？」

「せつかくだし少し位なら・・・ねっ？」

「でも・・・私は・・・」

「ムギー行くぞ！！」

「はい」

「じゃあまってるから」

俺に抱きついてきた……

「濡……やばい……いろいろとやばいから離れて……グハッ……」

そして時間は過ぎ空に赤みがかかった頃……

「っしょ、はああああ！海水飲んだ」

「たどり着いたぞ！！黄金の国ジパング」

「まだまだ」

おりよ？練習は？

「うおっ！いつの間に……」

「せっかく海に来たんだから思う存分遊ばないと、ここに来た意味が……」

「練習は？」

「あー！！練習」

「「忘れてたんかい！！」「」

「ま、まったくー律が遊ぼつとか言うからだぞー」

「一番楽しそうに遊んでたのは誰だ……」

「っーん」

「は、お腹いっぱい」

「は、床が冷たくて気持ちい。こっやって目を閉じるとなんか波にながされてる感じがするよねえ」

「あつ本当だ」
「おやすみなさい」
「おやすみ」
「寝るなよ!!」
「始めるぞー」
「二人とも起きて!!」
「……プチッ」
「ムギ、ちよつと「テメエら起きやがれ!!何しにここに来たんじやばけえ!!起きんのならその根性いちから叩きなおしちやるわ!!」
「ひ、ひい。す、すいませんでした!!」
「分かればよろしい」
「な、なんていう気迫……」

ベンベンベン
ジャカジャカジャカ
ポンポンポン

「なあ今日はもうやめにしようぜ?」
「練習が目的でここに来たの!!」
「溲の言つとおりだぞ!!」
「そりゃ、そうだけどさ」

俺はある事を思いついたので溲に提案する

「ゴニョゴニョゴニョ」
「ナイスアイディアソラ!!そう言えば律、最近太ったんじゃないか?」

「へっ!?!」

「特に〜お腹の所とか」

「え、ええ!!」

「って男の俺がいるのに服をめくるなや!!」

「最近ドラム叩いてないからかなあ?」

「ウギヤーオギヤギヤー!!」

ドンガラガシヤガシヤ

「ああ、もうギターもてない!!」

「「えっ!?(はっ!?)」」

「だってこのギター重いんだもん」

「だから軽いのにしとけて言ったのに・・・」

「誰だー!このギター買っって言ったの!?!」

「誰だっ たっ け唯?」

「すいません、私です。」

即効で土下座して謝ってきたよ・・・

「そろそろ床あつたまつてきたね」

「ああ」

「「「ごろりごろりごろりごろり」」」

「汚れちゃうわよ」

「うわあ、またひんやり」

「そんなんで学園祭どうするつもりなんだよ」

「俺がフェニックスのメンバー集めて軽音部の代わりに演奏する」

「それじゃあ意味ないだろ!!」

「だからメイド喫茶がいいって言ってんだろ」

「あ、お化け屋敷だよ」

「唯、お前何にも分かってない。澪を覚えてみる」

「な、何急に」

「澪ほどメイド服が姿が似合う奴なかないぞ」

「ああー!!」

「黒のストッキング!! 純白のエプロン!! そしてメイドかちゅうしゃー!! 萌萌くキュン!! とか言ったりして〜!!」

「よし、今すぐ用意させようー!!」

p i p i p i

「しなくていいー!!」

「ちっ見て見たかったのにな〜」

「終わったら本当に練習するからな〜」

澪さん、スイカ食べながら言っても迫力ないです!!

「分かってるって」

「うふっ」

「「せーの」

ドーン

唯の後ろで花火が上がる

「それじゃあ、最後の曲。いっくぜえー!!」

その姿はとても幻想的だった。・・・唄ができそうだ

光の虹・・・

「Oh yeah Oh yeah!!・・・ってあれ?もう終わり?」

「予算がな」

「いつかまた」

「そうだな。武道館公演ではでにバババババーンとー!!」

「武道館?」

「おいおい、目標は其処だって決めただろう?・・・な?」

「へっ?」

「じゃあその時はピンクがいい!」

「小学生かよ・・・」

「え〜だってかわいくない?」

「ここは虹色だろやっぱり」

「おお! 虹色かさすがソラだな!」

「じゃっじゃっじゃっじゃっじゃん」

「ちよつと待て、これhello the worldじゃん! テー
プ間違ってるよ!」

「武道館目指すならまずこのくらいは出来るようにならないとな」

「ちよ! 溲それ違っ! 止める!」

「えっ?」

しかしとき既に遅し

『お前らが来るのを待っていた、死ねえええええええ!』

「あゝあ、やっちまった」

「聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない
い」

「フジツボ・・・」

「うわあああああ!」

「膝の皿屋敷」

「いやあああああ! やだよおおおお!」

ヒッグヒッグ

あゝあ、向こう向いて体育座りしちゃったよ

「りっちゃん」

「やりすぎだよ」

「う、うう・・・あゝ悪かったな溲」

「ったく、溲大丈夫だよ。何にもないから・・・な?」

「ほんと・・・?」

ぐはっ!! 俺に500,000のダメージ。もうやめて空の残りラ
イフは1よ!!

「はふう、萌萌キユン!!」
「やべえ、お持ち帰りしていいですか？」
「……ノノノノどうぞ……」
「つて、いいんかい!!じゃあ遠慮なく」
「やめる空!!」
「はやまっちや駄目だよソラ君!!」
「はっ!!俺は何を」
「……お持ち帰りされても良かったのに(ボソッ」
「なんか言ったか?」
「な、なんでもない!!」

「うううう」
「漣、ごめんな!!」
「ぶう」
「ほら漣もいい加減許してあげたら?」
「ソラがそう言うなら……」
「そう言えばさっきの曲……」
「あれはhell the worldって曲だ。見てろ」
「俺はhell the worldの前奏だけ引く」
「わ、私も弾ける!!」
「そう言っただけで唯も弾き始める」
「嘘……」
「ギューイイイン」
「どつだつた?」
「すごいわ、完璧よ」
「えへへへへ」
「でも『ミヨオオオン』って所が分からなくて……」

「ミヨオオオン？」

「多分それチヨークキングの事じゃないか？」

「チヨークキング？」

律が唯にチヨクスリーパーを掛ける

「いやそれはチヨークスリーパー。」

チヨークキングって言うのは音を出しながら弦を引つ張る事

ジャーン

「そうすると」

ミヨ〜〜ン

「なっ？」

「おお！！」

「これで」

ジャーン

「こっつ？」

ミヨ〜〜ン

「そうそう」

「唯上手いぞ」

「クフフ、プフフフ」

「えっ？」

ジャーン ミヨンミヨンミヨン

「プハハハハハハハ！！」

「え、ええと・・・」

なぜ澁は俺に助けを求める？

「プハハハハなんかこれ変！！アハハハウフフ！！」

「変って・・・」

「ツボみたいだったな」

「フジツボ！！」

ドン

「……なあ漣……なんでいつも俺に泣きながら抱きつくんだ？俺としては嬉しい限りだけど」

「私じゃ……嫌？」

だから涙目と上目遣いは反則だって

「いや、別にいいけど……」

「そろそろお風呂にしましょう？」

「おお、いいな」

「私もいいぞ」

「私も」

「私もいいぞ！！」

上からムギ、俺、漣、唯、律だ

「それで男風呂ってどこだ？」

「あつ、言い忘れてましたけど混浴です」

「じゃあ、先にどうぞ」

「なに言ってるんだ空。お前も一緒に決まってるだろ」

「そうだよ〜空君も一緒に入るっよ〜」

「駄目に決まってるだろ。だいたい恥じらいを少し持て。なあ漣」

「わ、私は別にいいぞ／＼」

「ま、まさかの裏切り！？」

「よおーしムギ、唯！！空を連行しろ！！」

「分かったわ。りつちゃん」

「分かりました、りつちゃん隊長！！」

俺は風呂場まで連行されたのだった……無念

「うわぁ〜まさに露天風呂まであるとはねえ」

「今日は本当に楽しかった〜」

「うん・・・ムギとソラが言ってた通りあまり心配することなかったのかもな」

「そうだな」

「だったらもつと遊べば良かったのに!!」

「うわっ!!誰だ」

「うらああああ!!」

「・・・あつやべふつとばしちゃった

「・・・わりい。不審者かと思った・・・」

「ムキイイ!!どちらかと言えばお前の方が不審者に見えるわ!!」

「お前が連れてきたんだろうが!!つたくこつちだつて恥ずかしいの我慢してさらに理性保つてんだから誉められこそしても不審者呼ばわりされる義理はないぞ!!」

「うっ・・・それにしても良く溲の体見て発情しないよな。こんながいい体してるのに」

「俺だつて理性保つのがやっとなんだぞ。いつ襲い掛かるかわかんないぞ」

ボン

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あー律が変な事言うから溲がオーバーヒートしちゃったよ」

「お前のせいだろ!!」

「あゝ、いい湯だった」

「そうだな」

「俺ちよつと、外に星を見に行つて来るな」

「おう」

「漣、チャンスだぞ！」

「わ、分かつてるけど。や、やっぱ恥ずかしい／＼／＼」

「つべこべ言わずに言つて来い」

私は律たちに後押しされ空に会いに行く事にした

「／＼．．．つだれだ？」

「そ、空？」

「漣か．．．どうしたんだ？」

「えつと．．．その．．．空に話があつて」

「なんだ？」

「えつと．．．その．．．わ、私空の事が好き！！／＼／＼」

「．．．イマナンテイタノコノヒト？」

「えつと、すまん。もう一度」

「だから、わ、私は空の事が好きだ！！／＼／＼」

「．．．」

スッ

俺は漣に近づいて抱きしめた。

「俺も漣が好きだよ」

「えっ?・・・じゃ、じゃあキ、キスして!!」

「いや、ここじゃ駄目だ。その瞬間を今か今かとカメラを持って待ち構えてる奴が一人いるからな」

「あはははは、ばれてたか」

「り、律!!」

「だから止めとこつて言ったのに」

「ゆ、唯!?!」

「ゴメンね?二人とも」

「む、ムギまで!!あ、アワアワノノノノ」

「あーあ、オーバーヒートしちゃったよ」

「それじゃあ寝室なんだけど・・・私と唯ちゃんとりっちゃん。空君と漣ちゃんかどうかしら?」

「・・・恋人同士になったのはいいが寝る部屋まで一緒と言っのほまずいだらう」

「でも三人部屋が二つしかなくて・・・」

「じゃあ俺はリビングで寝るから二人づつで寝ろ」

「でもそれじゃあ・・・」

クイクイ

ズボンが引つ張られ引つ張られた方を見ると幼児化した漣がちよこんと座っていた。

「一緒に、寝よ?」(コテン)

「・・・はあく、分かったよ」

俺はこうして漣と寝る事になった

別荘のある部屋

「・・・なんで布団も一枚しかないんだ？」

「い、一緒に寝ればいいだろ？／／／／」

「おっ、いつの間にか溇が元に戻った」

「そ、その・・・い、今はだ、誰もいないから・・・さ、さっきのつ、続き・・・／／／／」

「ん？ああ／／／」

チユツ

俺は溇の唇に自分の唇を重ねる

「・・・あ、ありがとう／／／／」

「じゃあ寝よつか」

その後、俺は溇と一緒に眠りについた。別に変なこととはしてないぞ？本当だぞ？

「おーい、空ー！！写真できたぞー！！」

「ああ、見せてくれ・・・／／／／こ、これは結構恥ずかしい写真が入ってるな」

写真を見ると溇が俺に抱きついて寝てる写真が合った

「律、これくれ」

「はい」

「サンキュー」

その後、
澁に私に言った結果律が澁に首を絞められて延びた

第十六話 合宿！！（後書き）

久しぶりの更新です。いきなりの急展開ですいません。感想待ってます

第十七話 デート

p i p i p i p i p i

誰からだろう。

「もしもし」

『も、もしもし。そ、空か？こ、今度のに、日曜日、ひ、暇か？』

「ああ、暇だけど。」

『な、なら、ど、どこかに、あ、遊びに行かないか？』

「おっ！溇からデートに誘ってくれるとは、分かった。駅前に9時で良いか？」

『う、うん。あ、ありがとう』

p i

「……切れちゃったよ」

そして日曜日

ただいまの時刻8時30分。ちょっと早く着すぎたかな？と
思っていると

「空〜!〜!」

声の聞こえたほうを向くと溇がこちらに走ってきていた。

「はあはあはあま、待ったか？」

「いんや、今来たところ。じゃあどこ行く？」

「じゃあ商店街行かないか？」

「ああ、じゃあ商店街で良いか」

今日は空と初めてのデート。昨日は緊張して眠れなかった。
私が駅前に行くとき空は既についていた。

「はあはあはあま、待ったか？」

「いんや、今来たところ。じゃあどこ行く？」

「じゃあ商店街行かないか？」

「ああ、じゃあ商店街で良いか？」

私たちは商店街に移動した。

「うわあ、すごい人ごみだなあ。溇はぐれるなよ」

「う、うん」

俺は離れないように溇の手を握り締める

「じゃあどこ行く？」

「じゃ、じゃああの服屋へ入らないか？」

「いいぞ」

洋服屋……

「わー、あの服かわいい!!」

「じゃあ、俺はあそこで待ってるから決まったら言ってくれ」

「分かった!!」

数十分後・・・

「空々、こっちとこっちどっちが似合うかな？」

澪がもって来たのは青いワンピースと白いワンピースだった。

「うーん、澪は可愛いからどっちも似合うな。うーん・・・そ
うだー！」

俺は澪の手を引っ張ってレジまで行く

「あの〜、これください」

「えっ！？わ、悪いよそんなの」

「いいから、いいから」

「17,000円になります」

「カードで大丈夫ですか？」

「ま、真っ黒な、か、カード・・・」

あれ？澪には言わなかったっけ。店員さんがめっちゃ驚いている。

俺は仕方がなく財布から現金を出す。いやね、店員さん困ってたか
らさ

「ほれ、俺からのプレゼント」

「あ、ありがとうノノノ」

「気にするな。時間もいっころあいだしそろそろ飯にするか」

「ああ、近くにマ ドナ ドがあったと思っ」

「マクか。」

俺たちは服屋をでてマツ に向かった。途中で澪がネックレスを眺
めていたので、後で買って渡そうと思っ。

ツク・・・

「澪はなに食べる？」

「わ、私は・・・チ ンフィ オのセット。飲み物はオレンジジュ
ースで。」

「分かった。買って来るから待ってる」
俺は買いに行くと思せかけてさっきの店へ戻った。

「おっちゃん、このネックレスペアで頂戴？」

「おお、兄ちゃん彼女にプレゼントかい？」

「はい、まあ」

「そうか若いもんはいいねえ。よしおまけだ、この指輪もペアで持つてけ」

そういっておじさんが渡してきたのはイルカの柄が入った指輪だった
「サンキュおっちゃん」

俺はおっちゃんに例を行って店に戻った

「キンフ レオのセット一つとエ フィ オのセットを一つください」

「お飲み物はどういたしますか？」

「オレンジジュースとコーラで」

「お会計は960円です」

俺は財布から1,000円札を出しおつりを受け取る。

俺が買ったものを持ち席に向かうと溻が何人かの男に囲まれていた

「ねえ、その君？これから俺らと遊びに行かない？」

「え……その……け、けっこうです……」

「そんな事言わないでさあ、ねえ」

こういうのはどこにでもいるんだな、俺は買った者を近くの席に置き男に話しかける

「俺の連れが何か？」

「ああん？お前なんか呼んでねえよ。それよりお嬢ちゃん遊びに行こうぜ？」

そういつて男は溲の手にふれようとす。

俺はその手をつかみ捻る

「汚ねえ手で溲に触ってんじゃねえ」

俺はそのまま男を投げとばす

「さっさと帰んな。お前らみたいな不良が来るところじゃねえぞ？」

「てめえ、覚悟はできてるんだろっな？」

「？なんの？お前まさかここでやるっつて言っの？まあやるなら手加減しないけど」

「なめやがって、やるぞお前ら」

「お、俺は帰らせて貰うぞ！お、お前らも止めといたほうが良いっつて！！」

「なにびびってんだ？こんな奴一人に？」

「お前そいつは桜ヶ丘中の鬼ブギャツ！！」

俺は男が言い終わる前に殴っとく。これ以上言われたら俺の平和な生活が崩れるからな

「お前らはどうする？」

「やっちまえ！！」

俺は・・・全て当て身で気絶させて置いた。

俺は不良を外に追い出し席に着く

「大丈夫か溲？」

「あ、ああ。ありがとう」

「どういたしました」ナデナデ

「・・・っは！？いつの間にか溲をなでていた！！」

「お客様、あの不良どもを追っ払っていただき、ありがとうございます。あの不良はここ最近この店に来ては営業妨害をされてまして、困ってたところなんです。本当にありがとうございます」
店長らしき人が俺に話しかけてきた

「いやいや、お礼を言われる事なんてないよ。俺は澪を守っただけだしね」

「それではゆっくりお召し上がりください」
そういつて店長らしき人はどっかに行った。

「なあ澪、手出してくれ？」

「なんだ？」

そう言いながら手を出す澪。俺はさっき買ったネックレスと指輪を差し出された手の上に乗せる

「ど、どうしたんだよ空！！こ、これた、高かったんじゃないの？」

「澪が物欲しそうに眺めてたからな。それとその指輪はおっちゃんからのおまけだ」

「あ、ありがとう！！」

「いってことよ。さてさっさと食って他の場所行かない？」

「そうだな。今日は五月蠅い律もないしな」

「ハハハ、そうだ……」

「どうしたんだ空？」

「澪……後ろ……」

「えっ？」

澪が勢い良く後ろを振り向くと……

「だ、れが五月蠅いつて？」

「り、律！！な、何でここに！！？」

「外を歩いていたらたまたま見つけたから、ちよっかい出しに来た。それより二人はデートですか？」

「あ「ほら、律。二人の邪魔はしない」……なんでお前まで？」
そこにいたのは池上大和だった。

「げっ！大和……」

「ほら、行くぞ？」

「ぎゃああああ！！はなせえええ！！」

「やめろ、まるで俺がお前を誘拐してるみたいじゃねえか!」
実際そうなんだろうが・・・大和は律を連れて店を出て行った
「い、一体なんだったんだ?」

「さあ?」

俺たちは食事を再開した

俺たちはあの後、いろいろな店を回った。そして今は帰宅途中。

「そ、空! きよ、今日はありがとう」

「いや、俺も楽しかったよ」

「私もだ、ありがとう」

そうこうしてる内に澪の家の前まで来た。

「空、また今度も遊びに行こうな」

「ああ」

「・・・空!」

「うおっと!! どうしたんだ?」

澪が俺に抱きついてきて一瞬倒れそうになるが何とか持ちこたえる

「私、入学式の時空とぶつかっただろう? 私はその時から空の事が好きだったのかもしれない」

「・・・」

俺は黙って澪の話を聞く

「でも、私が誘拐された時、空は私を助けてくれた。その頃からもう気持ちが抑えられなくなってどうしたらいいか分からなくなった。

「・・・でも、今は私、幸せだ」

澪が俺に向けた笑顔は、太陽よりも明るく綺麗だった

「だから、これからもよろしくな?」

「もちろんだ!!」

俺は漣を強く抱きしめ、漣の唇に自分の唇を重ねる

そのキスは短くも長くも感じた。一秒だったかもしれない。もしかすると一分だったかもしれない。しかし今はそんなことは関係ない。俺が漣を好きだって事を再確認した。ただそれだけなのだから

「それじゃあ、ま、また今度／＼／＼」

「ああ、けど家に入ったら大変だぞ？」

「えっ? どうい「じゃあな」・・・」

「どういことだろう?」

私が家の扉を開くとそこにはニコニコ微笑むママがいた・・・なんだ?

「漣ちゃん? 聞かせて貰ったわよ? どういことか説明してね」

「えっ!?!?・・・何処から聞いてたの(見ていたの)?」

「えっとね、漣ちゃんが空君に抱きついたところから、ブチュってキスしたところまでかな?」

「それって全部!!」

私はその日はママにこっぴど絞られた。ママは終始ニコニコしていて、最後に

「空君ならいいんじゃない?」

って言われた時に顔を真っ赤にした私は悪くない。

第十八話 顧問！！

俺は今ムギと学園祭での講堂使用許可を貰いに言ったのだが、軽音部が部活と認められてないらしく借りる事ができなかった。

「にしても、軽音部がまだ部活として認められていないとは驚きだな」

「そうですね、音楽室もかなり私物化しちゃってるしまったくもってその通りである」

「いったああああ！！」

「この声は……」

「唯ちゃん？」

「見たいだな、あそこでさわこ……先生に見てもらってる」

「さわ子先生って綺麗よね」

「あつ！ムギちゃんにソラ君！！」

「えっ！？」

「驚きすぎだろ……」

「ムギちゃんとソラ君はどうかしたの？」

「あついや、その……綺麗だったな」って

「ああ、さわ子先生ね。」

「……やべ、噴きそう」

「それより、どこ行ってたの？」

「俺たちは遷に言われて学園祭のステージを借りる申請に行ったんだ」

「……軽音部がまだ正式なクラブとして認められてないらしくて断られちゃった」

「ふん……えっ？」

「部として認められてないだって!?!」

「ああ、ってかそもそもお前クラブの申請書だしてないだろう!?!」

「……………あつ」

ガサゴソガサゴソ

「……………あつた」

「……………はあく。本当に疲れる……………それより澪は?」

「まだあそこで怯えてる」

部屋の片隅には耳をふさいでいる澪がいた

「いい加減戻つてこーい!?!」

「はあく、澪を元に戻したら和のところ行くぞ」

「和ちゃん?」

「和は生徒会だろ?」

「初耳!?!」

「唯、お前に限っては何も言わん脳手術を受けた方がいい」

その後俺は澪を何とか立ち直らせ生徒会室へ向かった。

「よう和」

「あら空と軽音部の人たちじゃないどうしたの?」

「実はうちの馬鹿部長が部活の申請書だしてなかったみたいで……………

・代わりに書いてくれないか?頼む!?!」

「お願い和ちゃん!?!」

「しょうがないわね」

和は慣れた手つきで申請用紙を書いていく

「軽音部……………部員は五人……………で顧問は?」

「……………顧問?」

「居なかったのか？俺はいるもんだとばかり・・・」
「・・・」

「山中さわ子我が校の音楽教師である。その綺麗な顔立ちと、柔らかな物押しで生徒だけでなく教師の間でも人気が高い。さらに楽器の腕前や歌声もすばらしい」

「あのっ！」

「・・・ファンクラブが存在するほどの人気がある」

「さつきから何を言ってるの？」

俺たちは律の後ろから姿を現す

「あなた達・・・」

「・・・先生！！」「」「」

「はいっ？」

「軽音部の顧問に鳴って下さい！！」

「まだ・・・顧問居なかったんだ」

「先生・・・顧問になったほうが見のためですよ？」

「えっどう言う事？」

俺の事に気づいてないとはな・・・

「先生しか頼れる人が居ないんです」

「お願いです先生」

「なってあげたいのは山々だけど、私吹奏楽部の顧問してるからか
けもちほはちよつと・・・」

「そんな・・・」

「本当、ゴメンなさいね？」

「今まで声を掛けてきた男は数知れず」

「だからおだてても無理です!!」

「時間なら取らせません!」

「練習も自分たちでやりますから!!」

「ここに名前書いてはんこ押すだけ!! ねえ簡単でしょ?」

お前はセールスマンか!! と突っ込みたい気持ちを抑える

「ちょ、ちょっと!」

「ジーーーー先生この卒業生ですよね」

「えっええ」

「さっき昔の軽音部のアルバム見てたんですけど!!」

「えっ!?!」

「うーん」

「どうかしたのか?」

「くつくつく気づきやがったよ。ぷっぷっぷ」

「アルバムは何処にあるの?」

「漣、ちよつとこの鞆持ってくれ、そして後で音楽室へ来い」

「部室ですけど・・・」

「そう・・・」

「ドン!!」

俺はさわ子が掛けだす前に走り出す。

たっ たっ たっ た!!

俺が後ろを見るとさわ子が障害物を難なくクリアして走ってくるさ

わ子が居た。アイツ人間か?

「おっついたついた」

俺はアルバムではなくあの結婚式で使ったギターを持って隠れさわ

子が来るのを待つ

ドン

「アルバムは・・・これで・・・もう・・・ッ! 無い!!」

「遅かったな先生?」

「やっぱり先生なんですな」

「ほら、この人・・・」

律がアルバムから抜いていた写真を出す

「良く分かったわね」

「そうだな。唯は偉いぞ。さわ子、このギターを覚えているか？」

俺は結婚式で使ったギターを取り出す

「そのギターは・・・記憶に無いわ」

「どうかな？俺の名前は春山空。このギターはいつぞやの結婚式で俺がラブを引いた時のギターだ」

「・・・思い出したわ。まさかあなたが居るなんてね空くん」

「じゃあもしかしてこの声も」

唯がラジカセを取り出し、スイッチを入れる

『お前らが来るのを待っていたあシヤラアアア！！！！！！』

「やめてっ！恥ずかしい！！ふっ？」

「うう聞こえない聞こえない」

「おい、澪が怖がってどうするんだ？」

「あれ？じゃあギターも」

「あっそうだ。弾いて弾いて！！」

「えっ！？」

「まあまあ」

生きて帰ってこいよ・・・ギー太

「ちよっやめっだめっドキュウウウン」

あっ、やっちやっとな

「くっくっくっくっく」

「先生？」

「くっくっくくしゃあねえな」

「くっくっく目つき変った！！」

おっ澪が復活した

ドゥドゥントルウトルウトルウ

「はや弾き！！」

ピロリピロリピロリピロリ

「タツピングー!!」

ガガンガガンガガン

「歯ギター!!!」

「ああ私のギター……」

泣くくらいなら貸すなよ……

「おめえら音楽室好きに使いすぎなんだよ!!!」

「……ごめんなさい」「」「」

「だいたいな!!!」

「さわ子口調」

俺は紅茶を飲んでいる。うゝん上手いな

「はっ!!今の見た?」

「……うん」「」「」

「ばつちり録音もしておいたぜ?」

「先生の時はおしとやかキャラで通すって決めてたのに……」

「俺がいる時点で無理って気づけよ!!」

「先生。顔を上げて」

「……りっちゃん」

「ばらされたくなかったら顧問やってください」

「プククククク」

「りっちゃん。遅しい子!!!」

「じゃあとりあえずなんか弾いてくれない?」

「ああ、じゃあ今練習している奴で」

「いいのか?」

「ああ。」

「行くぞ1・2・3・4!!!」

ジャカジャカジャン

)

ジャジャー

「って感じのオリジナルなんですけど。」

「うーん」

「どうですか？顧問として!!」

「うーん、そうねえ。空君以外は前ノリ後ノリとかリズムセクシヨンがばらばらとか、いろいろ気になることはあるけど・・・まず。ヴォーカルはいないの？」

「っは!!」

「おいおい、溇がやるんじゃないのかよ」

「じゃあまさか歌詞もまだ、とか？」

「えっ、ええと」

「それでよく学園祭のステージに出ようなんて考えたわねえ」

はあ、見るからに青筋が立っているさわ子をどうすればいいんだ？

「はあ、まあとにかく、ヴォーカルは俺がやるし歌詞なら溇が明日までに書き上げてくるからさ」

「え、ええ!!わ、私か!？」

「それならいいけど・・・音楽室占領して今までなにやってたの!」

「怒られた・・・」

「だいたいねえ!!」

「っひい!!」

「先生!!」

「あん!」

「ケーキいかがですか？」

「っええ!？」

「・・・いただきます!!」

「っっっいただくんかい!!」

やべえ今まで無視してたけど思わずツツコンでしまった・・・

r z

翌日

「「出来た!?!」」

「あ、ああ」

「見せて見せて!?!」

「えっもう!?!」

「いや、もうって」

「私も見たいな」

「で、でもやっぱり」

俺は背後から溲に近づき歌詞が書かれた紙を取る

「え〜っと、どれどれ?」

「私にもみっせろ」

君を見てるといつもハート

DOKI DOKI

揺れる思いはマシユマロみたいに

ふわふわ

「うっか、痒い!?!」

「り、律ぞ、その反応は溲にし、失礼だぞ!?!」

「ぞ、そうよ、り、りっちゃん!?!」

そんなコントをしていると溲が話しに入ってきた

「わ、私としてはいい感じに書けたと思うんだけど……. や

っぱ駄目かな?」

「べ、別にいいんじゃないか?でも、男の俺が歌うのはちょっとま

ずいから他の人がヴァーカルな」

「ぞ、そうよ。別に駄目とかじゃなくて」

「そうそう、ちょっとイメージと違ったかなって。ほら唯も何か言

ってやれよ」

唯の方を見ると目を輝かせてる唯がいた。

「凄くいい」

「マジで!?!」
おい律その叫び声はまずいだろ!!
「私は凄く好きだよ!!!この歌詞!?!」
「ほ、本当?」
「ムギはどう思う?」
ムギの方を見ると・・・
「超うっとりしてるー!!」
超うっとりしてるムギがいた
「ま、まさかムギも気に入ったの?」
「はい」
「あつ、こつ言つのアリ?」
「うん」
「ほんとに?」
「イエス」
「マジで?」
「どんとこいです」
なんか話しが噛み合って無い気がするのだが・・・
「ハハハ・・・さわちゃん!!」
「さ、さわちゃん!?!」
「さわちゃんはこの歌詞無いと思うよね?」
「え、ええ。そうねえ」
「だよね!?!」
いいのか?それで
「三人とももう少し考え直そうよ。まずは皆落ち着いて・・・」
「わ、わたしもこの曲好きかも」
「ええ!?!」
「まさかの裏切り!?!」
やべ、また突っ込んでしまった・・・
「・・・空、諦めよう。もう無理だ」
「シクシク」

「それじゃあ、もうこの歌詞で行くか」

「わーい」

パチパチパチパチ

「よかったねえ〜漣ちゃん」

「あ、ああ」

「じゃあ漣がヴォーカルってことで」

「へっ!？」

凄く食いつきようだな。まあ漣は恥ずかしがりやだもんな

「私は無理だよ!！」

「何で？」

「だ、だって……だってこんな恥ずかしい歌詞なんて歌えないよ!！」

「「おい、作者!！」」

「困ったわねえ。空君はやる気ないし」

当たり前だろ

「あ〜漣が駄目じゃあ……」

唯の方を向くと目を輝かせてこちらを見ていた

「あ〜律は？」

「私は無理無理。元々反対だったし、ドラムで精一杯」

「そうか……」

唯の方を再び向くと歌詞のかいてある紙を持ちこちらを向きながらウィンクしてきた。

「ムギは駄目か？」

「えっ? 私もキーボードで精一杯なの……」

「そうか〜」

再び唯の方を向くと発声練習を始めてた

俺が律の方を向くと手でバツテンを作られた

再度唯の方を向くと今度はハンカチを口でくわえ、涙目で訴えてきた

「あゝ唯、やってみるか？」

「えっ？私？でも、歌そんなに上手くないし、私で務まるかどうか
分かんないって言うか？」

「じゃあいいや。り」嘘、ごめん。歌う。歌いたいです。・・・
じゃあやってみる」

「え、それじゃあ歌ってみようか」

「了解」

「すうーはあー君を見てるといつもハート」ちよっとちよっと！・・・
ん？」

「ギター弾きながら歌わないと」

「あっそうか！忘れてた」

「おいおい」

「それでいいのか？」

「つたく、本当に出来るのか？」

「えっと・・・」

「ジャカジャカジャンジャカジャカジャカジャカ」

「「「「・・・今度は歌。忘れてる」「」「」

「うっうっうっギターを弾きながら歌が歌えない・・・」

「仕方ないわねえ、先生が特訓してあげる」

「先生！！」

「それじゃあまず歯ギターのやり方から」

「それはいいです」

「そうだぞ。最初はタッピングから」

「すーきみ」をみてる」といつもはーとどきどき」
「なあ!!」

「練習させすぎちゃった?」

「声枯れちゃった?」

「可愛子ぶつても駄目だー!!」

駄目駄目じゃん・・・

「そんな・・・じゃあヴォーカルは・・・」

「変更するなら今日中よ?」

「へっ? そうなのか? だとすると・・・」

皆の視線が溇に集まる

「ん? ん? ん? へっ! ?」

「そうねえ、溇ちゃんなら歌詞覚えてるだろうし・・・」

「歌詞作った本人だしなあ」

「がんばってねえ溇ちゃん」

「ハースキ、ゆいからもおねがい」

「えっ! ? わ、私は無理だよ!! 所、そうだそ、空がいいんじゃないか?」

「はっ! ? ここで俺に振るなよ!! 溇頼むやってくれ!!」

「わ、私は無理だよ」

「頼む!!」

「あゝもうじれつたい!! 部長権限でヴォーカルは溇と空!! 決定」
「ええええええ!!」

部室には二人の悲鳴が響いた

第十八話 顧問！！（後書き）

久しぶりの投稿です。

感想待ってます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2913n/>

けいおん!! ~ 転生者が送るストーリー ~

2010年11月21日22時23分発行